中學國文教科書

卷六

教科書文庫
4
810
41-1941
2000066277

41744
教科書文庫
4
810
41-1941
20000
66277

資料室

文部省檢定濟
和十六年十一月十三日　中學校國語漢文科教科用

海軍兵學校藏書之印

教科書文庫
4
810
41-1941
2000066277

吉田彌平編
石井庄司補訂

中學國文教科書

修正三版

中等學校教科書株式會社

広島大学
教
66277
図書

42
810
BB16

浜本純逸寄贈

中學國文教科書 卷六

目次

一 聖德太子……花山信勝 一
二 ちとせの宿……芳賀矢一 九
山室山……九
鈴屋……一七
三 空行く雁……〔曾我物語〕 一八
四 夜討曾我……〔觀世流謠曲〕 三
五 箱根路……正岡子規 三

広島大学図書
2000066277

六　朝……島崎藤村　三九
七　偉人……嘉納治五郎　四三
八　自他一如……橋田邦彦　五四
九　神無月の頃……兼好法師　六〇
　　柑子の木……六〇
　　高名の木のぼり……六一
　　懈怠の心……六三
一〇　案山子……六三
一一　日本の庭園……龍居松之助　六五
一二　作文趣味……高橋箒庵　七一
一三　鹽原……尾崎紅葉　八一

一四　水莖……八八
一五　競の瀧口……〔平家物語〕　九一
一六　長柄堤の訣別……坪内逍遙　九九
一七　大楠小楠……一一〇
　　笠置の靈夢……一一〇
　　最後の參内……一一五
一八　誠……三浦梅園　一二〇
一九　戲作三昧……芥川龍之介　一二四
二〇　芳流閣……瀧澤馬琴　一三七
二一　弟を戒む……高山樗牛　一四四
二二　物の初……幸田露伴　一五〇

二三　浮島が原……〔義經記〕　一五五
二四　鵜越……〔源平盛衰記〕　一六三
二五　富士の靈……野口米次郎　一七〇
二六　文化と健康……渡邊錠太郎　一七六

目次終

中學國文教科書　卷六

一　聖德太子

花山信勝

聖德太子
厩戸皇子
用明天皇第一皇子
推古天皇の皇太子
推古天皇二十九年（一六三）薨
御年四十九

花山信勝
佛教學者
東京帝國大學助教授
明治三十一年（一八九八）石川縣生

我が大日本帝國上下三千年の歷史に於て、或は一代の政治家として國家經綸の手腕を振ひ、或は百世の宗師として永く國民の渴仰を聚め、或は千載に大著述を遺して學界に貢獻した者も無いことはない。さりながら、この三者を一身に兼備へた人は、聖德太子以外、他にこれを求めることが出來ないのである。

聖德太子は、實に精神界・物質界の兩方面に亙り、その一代と共に永く後世を裨益し、わが肇國の精神を國民に闡明すると共に、廣

三寶
佛・法・僧

く海外に國威を發揚し、新に大陸文化を輸入してわが日本文化の進展を圖り、以て文運の興隆、新日本の建設に努め給うた不世出の偉人にましまし、たのである。その御治世に於ける神祇の崇拜、天皇中心思想の確立は申すも畏し、外に向つては任那日本府の復興、大隋國との對等外交を始めとして、文明の輸入に務め、內に於ては三寶の興隆、冠位の制定、憲法の發布、學藝及び殖產興業の奬勵、國史の編修等、我が日本文化建設のために努力し給うた御足跡は、國史の上に極めて明らかである。御在世の當時既に「法主大王」、「聖

聖德太子勝鬘經講圖　夢小石筆

慧慈
推古天皇の三年（一三五）來朝

日本書紀
六國史の第一
養老四年（一三〇）成る

王」などと尊稱されて、周圍の尊敬を受け給ひ、又その薨去に當つては、これを傳へ聞いた曾ての師友高麗の慧慈が「大聖」の薨去を悲しんで、齋を設け、經を說き、以てその高德を追懷讚歎し、その鴻恩を謝し奉つたといひ、わが國の諸王・諸臣、天下の百姓は、悉く皆老いたるは愛兒を失へるが如く、幼きは慈父母を亡へるが如くに泣悲しんだといふ日本書紀の記錄によつても、如何にその非凡にわたらせられたかといふことが窺ひ知られるのである。實に我が聖德太子こそは、上下三千年に亙る日本文化の最大恩人である。今日見る日本文明の基礎も、太子によつて始めて確乎たる礎石の上に築かれたのである。その後、文化の流に幾多の變遷はありはするが、しかも常に太子の御精神に導かれて我が國民思想の復活が見られて來たのである。今後永遠に榮え

推古天皇第十五年
皇紀一二六七年
小野臣妹子
推古天皇の御代の朝臣
遣隋使
鞍作福利
推古天皇の御代の朝臣

ゆく我が帝國の尊き記錄たる日本歷史も、亦必ずや太子の日本精神を基調として愈〻赫々たる光彩を放つに至るであらう。過去一千三百數十年の歷史の流の中には、德川時代の史家や儒者や國學者の間に太子の誤解者が現れて、その御德業を累しまつつた者もありはするけれども、今や歷史は再び正當の光の下に照らし出され、太子を以てわが日本文化の太宗と仰ぎまつる點に於て、一人の異論を挾む者もないのである。

前に述べたやうに、聖德太子の盛德偉業は枚擧に遑ない程であるが、こゝには特にその自主的御精神について述べることにしよう。

聖德太子は、推古天皇第十五年の秋七月、我が國始めての外交使節として大禮小野臣妹子を隋國に派遣したまひ、鞍作福利を通

隋書
支那隋朝の歷史
支那二十一史の一
唐の魏徵等の撰

煬帝
隋の第二代の皇帝
文帝の第二子

鴻臚卿
支那の古の官名
四夷朝貢の事を掌る

事としてこれに隨行せしめられた。その時の國書の中に、

日出づる處の天子、書を日沒るゝ處の天子に致す、恙無しや。

といふ有名なお言葉のあつたことは、支那に傳はつてゐる隋書の中に見えてゐる。この時の記錄はわが國史の上には殘つて居らぬけれども、隋書によれば、時の煬帝はこれを覽て甚だ悅ばず、鴻臚卿に向つて「蠻夷の書無禮なるものあらば、復以て聞すること勿れ」と嚴命したといふことである。元來、支那は古くから中華又は中國を以て自ら任じた國であつて、自國以外の諸國を蠻夷視して來た國である。その當時に於ける彼我の文化程度の差異からいつても、支那と我が國とは可なり著しいものがあつたのであり、殊に南北の對立を統一して、文化復興の盛なることと正に旭日昇天の勢にあつた大國隋の天子に對して「日沒るゝ

江口　攝津國淀川に臨む海津平安朝時代に西國の船舶はこゝを基點とした

飛鳥京　推古天皇から持統天皇まで百餘年間の皇居の地今の奈良縣高市郡飛鳥村及び高市村附近一帶

海石榴市　古昔大和國磯城郡にあつた市今の奈良縣三輪町の一部

難波吉士雄成　推古天皇の御代の朝臣

處の天子」と呼び、彼が海東蠻夷の一小島と考へてゐた我を稱して「日出づる處の天子」といつたのでは、隋の天子の怒るのも當然であつたと言はねばならぬ。然るにともかくわが大使命を帶びた妹子は、その歸朝に際し、隋國の正使鴻臚寺掌客裴世清ほか下客十二人を連れ歸るまでの成功を收めたのである。この吉報を得たわが朝廷では、彼等隋使を迎ふるに當り、特に飾船三十艘をしつらへて難波の江口に出で迎へ、又彼等の飛鳥京に入るや、飾騎七十五疋を以て大和海石榴市の衢に迎へて歡待し、更にわが皇子・諸王・諸臣は悉く黃金の髻華を頭に着け、錦紫繡織及び五色の綾羅を着服して、莊嚴な儀式のもとに天皇拜謁の式を擧げたのである。而して彼等の歸國に際しては、太子は再び小野妹子を大使とし、難波吉士雄成を小使として、第二回の使節を派

遣せしめられたのである。その時のわが國書の中には、次の如く述べてある。

東天皇、敬みて西皇帝に白す。使人鴻臚寺掌客裴世清等到りて、久憶方に解けぬ。季秋薄冷、尊候如何。想ふに清念ならん。此にも即ち常の如し。今、大禮蘇因高、大禮乎那利等を遣はして往かしむ。謹白不具。

先の「日出處の天子」と「日沒處の天子」とが、今は「東の天皇」と「西の皇帝」とに變つてをるが、茲にも尙相變らず、正々堂々、彼我對等の國際關係を求められた我が聖德太子の自主的御精神が儼然として輝いて居る。これまで海外の一蠻夷國として、恰も屬國のやうにしか考へてゐなかつた我が日本國を、一躍獨立の君子國として彼にその存在を知らしめ、彼我對等の地位に立つて文化外

交の道を開かれたといふことは、聖德太子御偉業の中に數ふべき最も重大なものの一である。かくして太子は我が國開闢以來の對外關係に一新紀元を開かせ給うたのである。

太子が支那と對等の外交を開き、我が國威を海外に發揚せらるるに當つては、先づ國內の制度・文物、政治機構を整へ、飽くまで彼と對等の地位にまでこれを向上せしめようと思し召されたことはいふまでもない。そのため、豫め冠位の制定、憲法の發布、佛教文化の興隆等が行はれてゐる。而して、先に隋使の來朝に際しても、亦出來るだけ國內文物の優越を示さうと思し召された御意を拜察し得るのである。更に外臣往來の關門たる難波の地を選んで特に四天王寺の大伽藍を建立せられたことや、その後難波から飛鳥までの大道を造り給うたことなども、やはり前

四天王寺　今の大阪市天王寺區にある名刹　用明天皇の二年（一二四七）聖德太子御建立

に述べた趣旨によるものと考へられる。太子が彼の國に佛書を求め、その指南によつて親ら三經の義疏を御製作あらせらるるに當つても、決して彼の國の學匠の意見にのみ從ふことをなさらず、屢〻「而れども今は須ひず」とか、「大いに異なり」とか、或は「少しく當らざるに似たり」とか彼を批判し、太子獨自の御解釋を盛に述べさせ給うてあるのである。僅かこの一事を以てしても窺ひ知ることが出來るやうに、太子は常に飽くまでも自主的立場に於て外國に接し、外國文化に對せられた。これ我が日本の國威が益〻外に揚ることを得た所以である。（聖德太子と日本文化）

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
昭和二年卒
年六十

二　ちとせの宿

山室山

芳賀矢一

本居宣長翁
國學四大人の一
伊勢國（三重縣）
松阪の人
享和元年（一八〇一）
卒
年七十二
贈從三位

松阪
今の三重縣松阪市

我が國國學の大家で、德川時代に於ける國學を大成したといつてもよろしい本居宣長翁は醫者を業として居られた。口過ぎのために醫業をせられ、それで家計を維持しつゝ、國學大成といふ、醫術よりももう一層廣い仁術を行はれたのであつた。翁は固より醫者としての大家ではなかつた。しかし食へぬからといつて文學を見捨てる人ではなかつた。食ふ方を醫業に求めて好きな學問を研究された人である。眇たる伊勢松阪の一庸醫、それが天下を動かした大學者である。皇學の基礎を定めて、千古の模範となつた先生である。事を成すと成さぬとは、つまりその志の如何にあるのである。

翁の著述には徹頭徹尾漢意に僻することを戒めてある。それはその當時の積弊に反對せられたのである。漢學が盛で、漢學

でなければ夜も日も明けぬやうに思つた時代、日本固有の道を忘れてはならぬといふのが大人の主義、敷島の大和心を振ひ起さうといふのがその本領であるから、片つぱしから漢學に佞する輩を筆伐せられたのである。大人のこの主義は遂に尊王攘夷論の大本となつて、明治維新の大業に關係の大きかつた事はいふまでもない。翁が醫者だけで自ら甘んじて居られなかつたのは、國家のため大幸福であつた。

旁賀矢一

野道を人力車に搖られて、あの山は何、この山は何、お墓はあそこ

の山の茂みの處です」と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室山に着いた。車を捨てて爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。杉・松・椎など小暗い道を稍四五町も上つた處に淨土宗の寺がある。妙樂寺といつて翁には深い關係のあるお寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪が平地になつて居る。その中央の小高い土盛が卽ち翁の墓である。上に櫻の木が一本、本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に丸い石があつて、平田篤胤大人の

なきからはいづくの土になりぬとも魂はおきなのもとに行かなむ

と鐫つたのが立つて居る。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことはない。しかし數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍つて居られるのは、さぞかし滿足の事であらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで住僧に宛てられた手紙は今尙同寺に珍藏して居る。

山室の山に千年の宿しめて風に知られぬ花をこそ見め

妙樂寺
山室山の中腹にある淨土宗の寺

平田篤胤
國學四大人の一
秋田の人
天保十三年(一八四二)卒
年六十八
贈正四位

と詠まれたのはこの時である。二十年來一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど教へ子に數まへませとをがみ額づく。

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と偉大な感化力とは未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど絶大なものはない。

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青青とした伊勢の海を見はるかして志摩・三河・尾張等の崎々山々。近くは松阪市を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見えます」とホテルの主人は指さした。千古に卓越した

その著書
その最も著名なものは古事記傳四十八卷で翁が三十四年にわたる苦心の結晶である

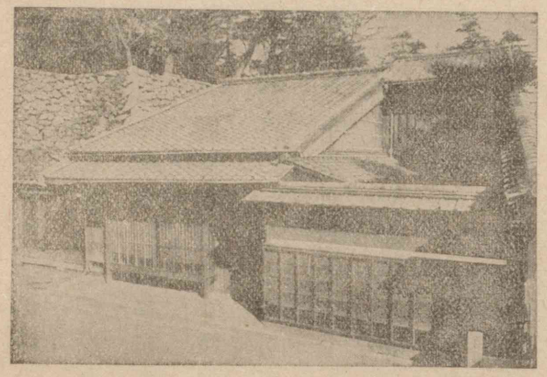
偉大な學者の奥城としては誠にふさはしい場所である。妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。

こゝの眺望も誠に美しい。

鈴屋

松阪に歸つて城跡の公園に行く。

こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存せられて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列せられて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十幾年の勤勉篤學、人をし



鈴屋

三十六の鈴
これは模造品で本品は陳列庫に在る

ワイマール
ドイツ聯邦チューリンゲンの首都

ゲーテ
ドイツの最も有名な詩人（西暦一七四九―一八三二）

シルラー
ドイツの有名な詩人・戯曲家（西暦一七五三―一八五〇）

て襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の恐もあるから、保存會でこの舊城址の一角へ移したのである。しかし庭の樹木・置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札までそのまゝになつて居る。臺所の竈も井戸も便所も元のまゝの形が殘されて居る。下が引出になつて居る小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繫がれて懸つて居る。こゝは卽ち翁が一切の著述を製作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日はさぞ堪へ難かつたらうと思はれて、この質素の家居の樣がいよ〳〵翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールでゲーテやシルラーの舊宅を見た時にも、その偉大な事業とその質朴な家居の情態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には一層この感を深うした。ゲーテやシルラーの舊宅を見た時は、日本にもかういふやうに偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やこれが實行せられて、先づこれを翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悅ばしいことである。

この松阪の公園は四望豁然、パノラマを見るやうで、絕景であるが、翁の遺蹟を移して更に崇高の威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇、松阪町民の誇は翁の遺蹟に越したものはない。城の大手門を出でて數十步、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が神宮風の樣式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返り咲をして居る。

東郷大將　東郷平八郎　薩鹿兒島藩士　元帥　海軍大將　大勳位　功一級　侯爵　昭和九年卒　年八十八

養和元年（一八一）

一萬　曾我十郎祐成の幼名

箱王　曾我五郎時致の幼名

父　河津祐泰　伊東祐親の子　安元二年（一一七六）工藤祐經の部下に殺された

宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、「さすがに本居翁の鄕土ゆゑ、櫻は一年中咲くのだらう」といはれたといふことである。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ風に知られぬ花にはありける

（芳賀矢一文集）

三　空行く雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思

曾我殿　祐信

工藤一萬　祐經

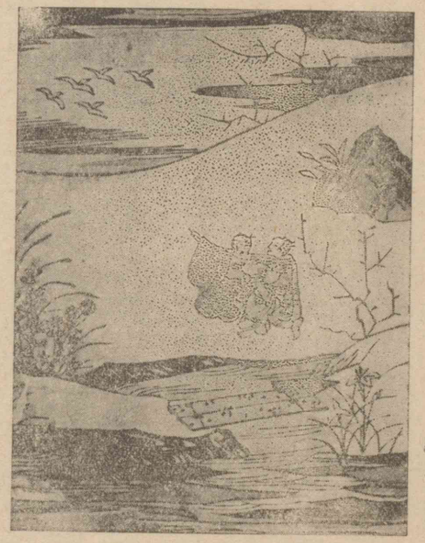
鎌倉殿　頼朝

この里　曾我　今の神奈川縣（相模國）足柄上郡曾我村

ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん『狩場より歸りたまふ道にて、工藤一萬とやらんに射られて死にたまひぬ』と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らでや過ぐらん」など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、「あれ見たまへ、箱王殿。空

に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實（まこと）の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も、馬・鞍・弓・矢を以て物を射ありくことの羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、



空行く雁
丹後本曾我物語

いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるゝぞや」とて、袖に顏を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢しく顏をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさましし、人もこそ聞け。いかに和上薦たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とく〳〵入らせたまへ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見あはせて、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも滿たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄刎の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あ

なたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、[illegible]もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も打頷きけり。年ばへには恐しきことかなと人々思ひけり。（曾我物語）

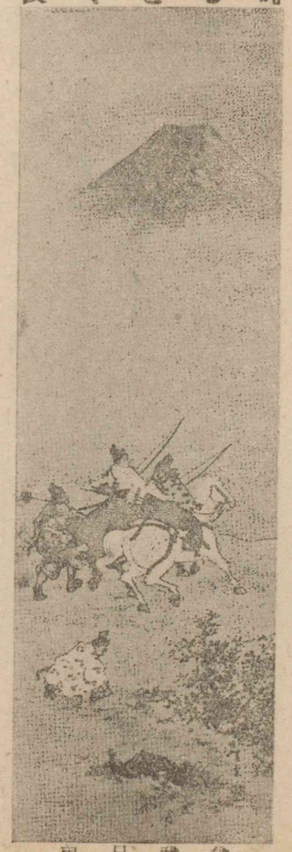
曾我兄弟弓を習ふ
北尾重政筆

四　夜討曾我

シテ前後とも五郎時致
ツレ十郎祐成
トモ前後とも鬼三郎
鬼王
後ツレ敵兵
同御所の五郎丸
東八箇國関東八州
我が君右大將源頼朝

シテ・ツレ謡四人次第「その名も高き富士の嶺の、その名も高き富士の嶺の御狩にいざや出でうよ。十郎詞「これは曾我の十郎祐成にて候。さても我が君東八箇國の諸侍を集め、富士の巻狩をさせられ候間、我等兄弟も人なみにまかり出で、唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人サシ詞「今日出でていつ歸るべき故郷と思へば猶もいとゞしく、上歌名殘を殘す我が宿の、名殘を殘す我が宿の垣根の雪は卯の花の咲き散る花の名殘ぞと我が足柄や遠かりし、富士の裾野に着きにけり、富士の裾野に着きにけり。十郎詞「急ぎ候程に、これははや富士の裾野にて候。いかに時致、然るべき處に幕を御打たせ候へ。シテ詞「畏まつて候。十郎詞「いかに時致、今に始めぬ御事なれども、我が君の御威光のめでたさは候。打並べたる幕の内、目を驚かしたる有樣にて候。かほどに多き

人の中に、我等兄弟が慕の内ほど物さびたるは候まじ。シテ詞「さん候。今にはじめぬ君の御威光にて候。さて彼のあらましは候。十郎詞「あらましとは何事にて候ぞ。シテ詞「あら御情なや、我等は片時も忘ることはなく候。彼の祐經が事候よ。十郎詞「げに〳〵某も忘るゝことはなく候。さていつをいつまでながらへ候べき、ともかくも然るべきやうに御定め候へ。シテ詞「御諚の如く、いつをいつとか定め候べき。今夜、夜討がけに彼の者を討たうずるにて候。十郎詞「それが然るべ



曾我兄弟
岩佐古香筆

鬼王　曾我十郎及び五郎の從僕
團三郎　同上鬼王の兄

う候。さらばそれに御定め候へ。や、思ひ出したることの候。我等故郷を出でし時、母にかくとも申さず候程に、御歎あるべきこと、これのみ心にかゝり候間、鬼王か團三郎か、兄弟に一人形見の物を持たせ、故郷へ還さうずるにて候。シテ詞「げにこれは尤にて候。さりながら、一人歸れと申し候はば、定めてとかく申し候べし。唯二人ともに御還しあれかしと存じ候。十郎詞「尤にて候。さらば二人ともに此方へ參れと御申し候へ。シテ詞「畏まつて候。いかに團三郎・鬼王此方へ參り候へ。團三郎詞「畏まつて候。シテ詞「團三郎兄弟これへ參りて候。十郎詞「いかに團三郎、鬼王もたしかに聞け。汝兄弟に申すべきことを承引すべきか、又承引すまじきか、眞直に申し候へ。團三郎詞「これは今めかしき御諚にて候。何事にても候へ、御意を背くこと

はあるまじく候。　十郎詞「あら嬉しや。さては承引すべきか。　國三郎詞「畏まつて候。何事も御諚をば背き申すまじく候。　十郎詞「この上は委しく語り候べし。さても我等が親の敵の事、彼の祐經を今夜夜討がけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば、故郷の母歎き給はんこと、あまりにいたはしく候程に、形見の品々を持ちて、二人ながら故郷へ歸り候へ。　國三郎詞「これは思ひもよらぬ御諚にて候ものかな。御意も御意にこそより候へ、この年月奉公申し候も、この御大事に眞先かけて討死仕るべき爲にてこそ候へ。何と御諚候とも、この儀に於ては罷り歸るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。　鬼王詞「なか〳〵の事、尤にて候。罷り歸ることはあるまじく候。　十郎詞「何と、歸るまじいと申すか。　國三郎詞「ふつつと罷り歸るまじく候。　十郎詞「これは不思議なることを申す

ものかな。さてこそ以前に詞を固めて候に、さてはふつつと歸るまじきか。　國三郎詞「さん候。　十郎詞「汝は不思議なる者にて候。のう五郎殿、あれを御還し候へ。　シテ詞「畏まつて候。やあ、何とて罷り歸るまじいとは申すぞ。さやうに申さうずると思し召してこそ、始より詞を固めて仰せられ候に、何とて歸るまじいとは申すぞ。しかと歸るまじきか。　鬼王詞「まづ畏まつたると御申し候へ。　國三郎詞「畏まつて候。　シテ詞「しかと歸らうずるか。　國三郎詞「罷り歸らうずるにて候。　シテ詞「おゝそれにてこそ候へ。罷り歸らうずると申し候。　十郎詞「何と、歸らうずると申すか。　國三郎詞「さん候。いかに鬼王に申し候。　鬼王詞「何事にて候ぞ。　國三郎詞「さて何と仕り候べき。罷り歸れば本意に非ず、歸らねば御意に背く、とかく進退こゝに谷つて候。　鬼王詞「仰の如く罷り歸れば本意に非ず、又歸ら

ねば御意に背く。我等も是非を辨へず候。但しきつと案じ出したることの候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐ながら團三郎殿とこれにて刺違へ候べし。團三郎詞「げに〳〵いづくにても命を捨つるこそ肝要なれ。いざさらば刺違へう。鬼王詞「尤にて候。シテ詞「あゝ暫く。これは何としたることを仕り候ぞ。十郎詞「やあ、兄弟の者還すまじきぞ、還すまじきぞ。まづ〳〵心を靜めて聞き候へ。今夜此處にて祐經を討ち、我等兄弟空しくならば、さて故鄕にまします母には誰かかくと申すべきぞ。地謠「敬ふものに從ふは、君臣の禮と申すなり。これを聞かずば生生世々、永き世までの勘當と、上歌地謠「かきくどきのたまへば、かきくどきのたまへば、鬼王・團三郎、さらば形見を賜はらんといふ聲の下よりも、不覺の涙せきあへず。

樊噲　漢王劉邦の忠臣

クリ地謠「それ人の形見を贈りし例には、彼の唐土の樊噲が、母の衣を着替へしは、永き世までの例かや。十郎サシ謠「今當代の弓取の母衣とはこれを名づけたり。地謠「然れば我等が賤しき身を譬ふべきにはあらねども、恩愛の契のあはれさは、我等を隔てぬ習なり。クセ「さる程に、兄弟、文こま〳〵と書きをさめ、これは祐成がいまはの時に書く文の文字消えて薄くとも、形見に御覽候へ。皆人の形見には手跡に勝るものあらじ。水莖の跡をば心にかけて弔ひ給へ。老少不定と聞く時は、若き命も賴まれず、老いたるも殘る世の習、飛花落葉のことわりと思し召されよ。その時時致も肌の守を取出し、これは時致が形見に御覽候へ。形見は人のなき跡の思の種と申せども、せめて慰む習なれば、時致は母上に添ひ申したると思し召せ。今まではその主を守佛の觀世音、この

夜討曾我　月岡耕漁筆

世の縁なくと、來世をば助け給へや。　十郎詞「既にこの日も入相の地謡「鐘もはや聲々に諸行無常と告渡る。　さらばよ急げ、急げ使。涙を文に卷籠めて、そのまゝやる、文のひぬ間にと詠ぜし人の心まで、今更思ひしら雲の、かゝるや富士の裾野より曾我に歸れば、兄弟すご〳〵とあとを見送りて、泣きて留るあはれさよ、泣きて留るあはれさよ。（中入）

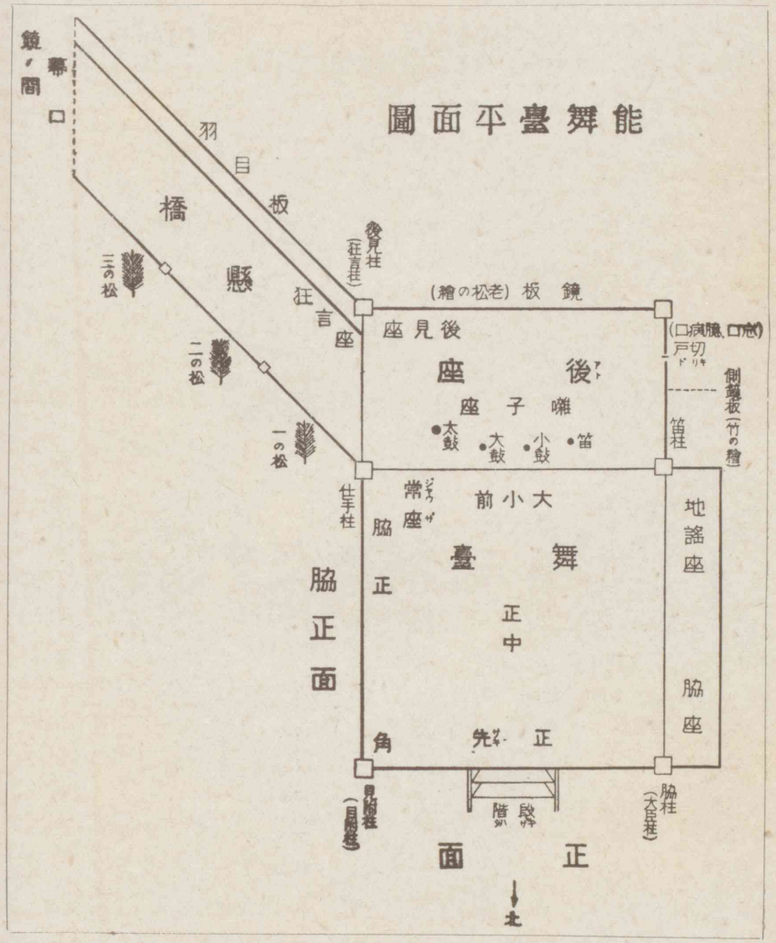
文のひぬ間　出所未詳

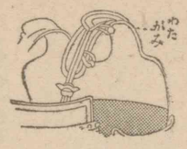
後ツレ地謡「一聲「寄せかけて、打つ白波の音高く、鬨を作つて騒ぎけり。シテ謡「あら夥しの軍兵やな。　シテ詞「我等兄弟討たんとて、多くの勢は騒ぎあひて、こゝを先途と見えたるぞや。　十郎殿、十郎殿、何とて御返事はなきぞ、十郎殿、宵に仁田の四郎と戰ひ給ひしが、さては早討たれたまひたるよな。　口惜しや、死なば屍を一處とこそ思ひしに、謡「物思ふ春の花盛、散り〳〵になつてこゝかしこに屍を

仁田の四郎　名は忠常　頼朝の臣

古屋五郎　この人曾我物語には見えぬ
張良　漢王劉邦の謀臣

さらさん無念やな。　上歌地謠「味方の勢はこれを見て、味方の勢はこれを見て、打物の鍔元くつろげ、時致を目がけて懸りけり。　シテ謠「あら物々しや、おのれらよ。　先に手並は知るらんものをと、太刀取直し立つたるけしき、ほめぬ人こそなかりけれ。　かゝりける處に、かゝりける處に、御内方の古屋五郎、樊噲が怒をなし、張良が祕術を盡くしつゝ五郎が面に斬つてかゝる。　時致も古屋五郎が拔いたる太刀の鎬を削り、しばしが程は戰ひしが、何とか斬りけん、古屋五郎は二つになつてぞ見えたりける。　かゝりける處に、かゝりける處に、御所の五郎丸、御前に入れたてかなはじものをと、肌には鎧の袖を解き、草摺輕げにざつくと投げかけ、上には薄衣引きかづき、唐戸の脇にぞ待ちかけたる。　シテ謠「今は時致も運つき弓の、地謠「今は時致も運つき弓の、力も落ち





わたがみ
鎧の名所

正岡子規
名は常規
俳人・歌人
伊豫國（愛媛縣）
松山生
明治三十五年（一九〇二）歿
年三十六

て、眞の女ぞと油斷して通るを、やり過し押しならべ、むんずと組めば、シテ謠おのれは何者ぞ。五郎丸謠御所の五郎丸。地謠あら物々しとわたがみつかんで、えいやゝ〳〵と組みころんで、時致上になりける處を、下よりえいやと又押返し、その時大勢おり重なつて、千條の繩をかけまくも、かたじけなくも君の御前に追つ立て行くこそめでたけれ。（觀世流謠曲）

五　箱根路

正岡子規

われうき世の旅の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりこゝに十日、身は今旅の旅に在りながら、風雲の思なほ已み難く、頻に道祖神にさわがされて、霖雨の霽間をうかゞひ、草鞋よ脚絆よと身をつくろひつゝ、一箇の袱紗包をうき世のかたみに擔うて、飄然と大磯の客舍を出でたる後は、天下は股の下、杖一本が命なり。

大磯
神奈川縣中郡大磯町

國府津
同縣足柄下郡國府津町

小田原
同縣同郡小田原市

旅の旅そのまた旅の秋の風

國府津小田原は一生懸命にかけぬけて、はや箱根路へかゝれば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白露光あり。

白露の中にほつかり夜の山

旅裝の子規

湯本
神奈川縣足柄下郡湯本村箱根口の北麓

湯本に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて「いざ給へ、好き宿まゐらせん」といふ。引かるゝまゝに行けば、いとむさくるしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、この旅亭に一夜の寒氣を受けんことは氣遣はしく、やゝ落膽したるが、まゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面目なれ。

だまされてわるい宿とる夜寒かな

つぎの日まだき起出でつ。一天晴渡りて、瀧の水朝日にきらつくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは逃ぐるにやあらん、はた此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運び自ら輕らかに、箱根街道のぼり行けば、鶯の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鶯の鳴くらしき

色鳥の聲をそろへて渡るげな

雙子山
箱根中央火山の東南端に聳えてゐる雙峯
標高千三百米

秋の雲瀧をはなれて山のうへ

病みつかれたる身の、一足登りては一息ほつとつき、一坂登りては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻に駕籠をすゝむるを耳にもかけずのぼり行けば、

山路の菊野菊ともまたちがひけり

どつさりと山駕籠おろす野菊かな

石原に瘦せてたふるゝ野菊かな

などおのづから口に浮みて、はや雙子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆樣の挨拶、何となくものさびて面白くおぼゆ。「名物ありや」と問へば、「力餅といふものあり」とて、大きなる餅の燒きたる二つ三つ、盆に盛りて來る。

元箱根
箱根山の頂上
箱根神社のある
處

山姥の力餅賣るすゝきかな

など戯れつゝ、力餅の力をかりて上ること一里餘、杉・檜の大木道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき、さながら仙源に入りたるが如し。

蘆の湖

紅葉する木立もなしに山深し

千里の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏碎きて登り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見出したる時の心廣さよ。餘りの絶景に恍惚として立ちもえ去らず、木のくひぜに坐してつく〴〵と見れば、山

更にしん〳〵として、風吹かねども冷氣冬の如く足もとよりのぼり、腦天にしみ渡るこゝちなり。

波の上に飛びかふ鵜鴒は、忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて、力なく水にすれつあがりつ胡蝶のひら〳〵と舞ひいでたる、箱根の頂とも知らずてや、いと心強し。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に兀然として現れ出でたる富士、こゝからも猶三千仞はあるべしと思ふに、更にその影

箱根街道大名道中
安藤廣重畫

金紋先箱・鳥毛・片鎌

を幾許の深さに沈めてさゝ波に縮みよせられたる、またなくをかし。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。

關もりのまねくやそれと來て見れば尾花がすゑに風わたるなり

薄の句を得たり。

大方はすゝきなりけり山の上

伊豆相模境もわかず花すゝき

明治維新前までは、金紋先箱の行列整々として、鳥毛・片鎌など威勢よく振立てく行きかひし街道の繁昌も、あはれものの本にのみ殘りて、草刈るわらべの小路一筋を除きて外は、草の生ひいでぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穗にとゞめたり。

槍立てて通る人なし花芒（子規全集―瀬祭書屋俳話）

六　朝

島崎藤村

朝は再び此處にあり、
朝は我等と共にあり。
埋れよ眠、行けよ夢、
隱れよ、さらば小夜嵐。

諸羽うち振る雞は
咽喉の笛を吹鳴らし、
けふの命の戰鬪の

島崎藤村
名は春樹
詩人・小說家
帝國藝術院會員
明治五年（一八七二）
長野縣生

よそほひせよと叫ぶかな。

野に出でよ、野に出でよ、
稻の穗は黃にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も取れ、
風に嘶く馬もやれ。

雲に鞭うつ空の日は、
語らず、言はず、聲なきも、
人を勵ますその音は、
野山に谷に溢れたり。

流るゝ汗と膩(ろうあく)との
落つるやいづこ、かの野邊に
名もなき賤のものゝふを
來りて護れ、軍神。

野に出でよ、野に出でよ。
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ、鎌も取れ。
風に嘶く馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて
爲す由もなく寢ぬるより、

薄き襤褸は纏ふとも、
活きて起つこそをかしけれ。

口には朝の息を吹き、
骨には若き血を纏ひ、
胸には誇、手に力、
霜葉を踏みて疾く來れ。

野に出でよ、野に出でよ。
稻の穗は黃にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も取れ。
風に嘶く馬もやれ。（藤村詩集）

七　偉人

嘉納治五郎

嘉納治五郎
教育家・體育家
貴族院議員、
東京高等師範學
校名譽教授
講道館師範
昭和十三年歿
年七十九

古來の生民蓋し幾萬億、その中より卓然として崛起し、功業德澤炳として萬世の下に輝いてゐる者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歷史から除き去つたならば、吾人の過去は如何に暗澹として如何に寂寞なものであらうか。幸にして幾多の偉人傑士が星の如く歷史の空に列んでゐて、今猶吾人の心中に不老のその輝を投じ、破闇のその光を耀かしてゐるので、吾人人類はこゝに始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。隨つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出來ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹してこれに新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に

大上は德をたて

大上ハ德ヲ立ツル有リ、其ノ次ハ功ヲ立ツル有リ、其ノ次ハ言ヲ立ツル有リ。久シト雖モ廢セズ、此ヲ之レ不朽ト謂フ。（左傳）

木戸松菊
名は孝允
舊萩藩士
內閣顧問
明治十年（一八七七）卒
年四十四
贈從一位

「大上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ」と曰つてあるが、德にもあれ、功にもあれ、言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に、壯快といへば偉人の事業ほど壯快なものはなく、崇高といへば偉人の人格ほど崇高なものはないのである。

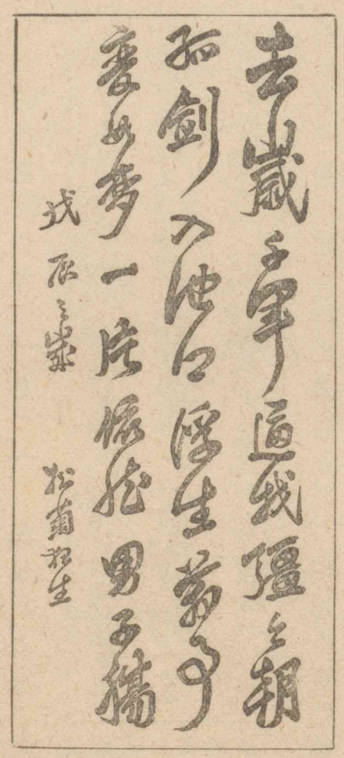
試に思へ、我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、その直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は大御稜威に因るは勿論であるが、下に幾多の偉人傑士あつて善く君國の爲に努力奮鬪した結果である。至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を贊したのは、木戸松菊であつた。高く自ら任じ、

大久保甲東
名は利通
舊薩兒島藩士
內務卿
明治十一年（一八七八）卒
年四十八
贈右大臣從一位

筆蹟
去歲千軍我ガ經ニ過ル。今朝孤劍他鄉ニ入ル。浮生萬事變ジテ夢ノ如シ。一片依然タリ男子ノ腸。
戊辰ノ歲
松菊狂生

西鄉南洲
名は隆盛
舊薩兒島藩士
參議
陸軍大將
明治十年（一八七七）戰歿
年五十二
贈正三位

篤く自ら信じ、沈毅端嚴善く斷じ、時局の紛雜を處理すること快刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風よく上下の信賴を得て國家の柱石となつたのは、大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏豁、安危利害の上に超脫して、泰然として動かず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは西鄉南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西鄉の量、三者相俟つてこの天地を旋轉するやうな大業

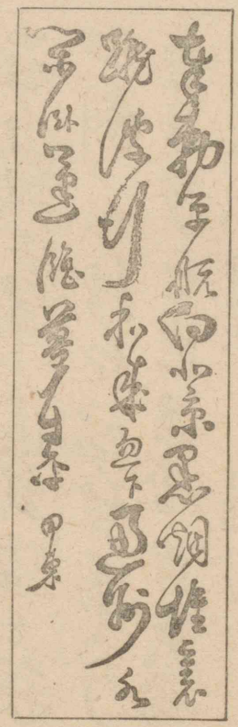


木戸孝允筆

勝海舟
名は安芳
舊幕臣
海軍卿
樞密顧問官
伯爵
明治三十二年（一八九九）卒
年七十七

筆蹟
勅ヲ奉ジ單航シテ北京ニ向フ。黑烟堆裏波ヲ蹴テ行ク。和成リテ忽チ下ル通州ノ水。閑カニ簾隱ニ臥シテ夢自ラ平カナリ。
甲東

が成就せられたのであつて、世に維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。當時彼等が協心戮力して經國の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり雋異卓拔、その炯



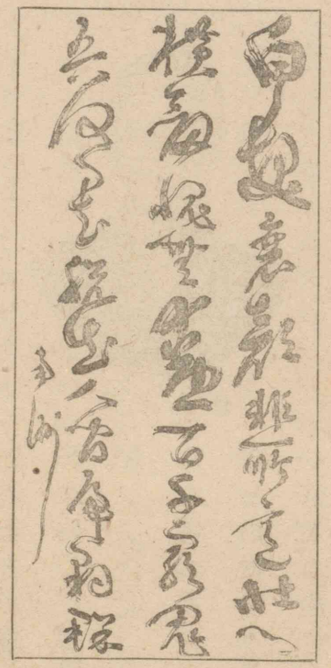
大久保利通筆

炯たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱橫、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げしめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

維新前後は我が偉大なる國民精神の著しく發揮せられた時で、偉人傑士の風雲に乘じて起つたものは甚だ多かつたのである

筆蹟
白髮蒼顏意トスル所ニ非ズ。壯心劍ヲ横タヘテ勵無キヲ憶ヅ。百千ノ窮鬼吾何ゾ畏レン。脫出ス人間虎豹ノ群。
南洲

が、就中海舟・南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業もかく速に圓滿なる成功を告ぐることが出來なかつたであらうと思はれる程である。我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に從ひ、世界の競爭場裏に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜である。吾人國民が景慕の情を傾けてこれが傳を立て、こ



西郷隆盛筆

吉田松陰
名は矩方
長州の志士
安政六年（一八五九）
刑死
年三十
贈正四位

橋本景岳
名は綱紀
越前の志士
安政六年（一八五九）
刑死
年二十六
贈正四位

藤田東湖
名は彪
水戸の志士
安政二年（一八五五）
震死
年五十
贈正四位

れが像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いてゐるやうに思はれるのは、實にその雄偉なる人格とその赫々たる功業とを證するものである。

更に吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すれば、その奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉、景仰に堪へないものがある。中にも、吉田松陰・橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本景岳を推す。二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶところではない」といつた。時に南洲は三十歳、景岳は二十三歳頃で

橋本景岳

身を殺して仁をなす
子曰ク、志士仁人ハ生ヲ求メテ以テ仁ヲ害スルコト無シ。身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スコト有リ。（論語、衛靈公篇）

一小私塾
松下村塾

五人の大臣
伊藤博文
山縣有朋
山田顯義
品川彌二郎
野村靖

あつたことを思ふと、景岳は我が國の青年偉人中でも最も卓越せる者といはねばならぬ。かれ睿智靈覺湧くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。不幸にして二十六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照らしてゐる。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁を成すといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出來る。彼が一小私塾の教育に盡くした熱誠は、幾多の志士を輩出せしめて王政維新の急先鋒となり、明治の御代にも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰・景岳に依つ

志學の齡
子曰ク、吾十有五ニシテ學ニ志ス。（論語、爲政篇）

賴山陽
名は襄
儒者・修史家
安藝の人
天保三年（一八四九）卒
年五十三
贈從三位

て英偉なる人物がその少壯期に於て既にかくも貴き事業を爲し得たことを詳にし、感歎の情に堪へないのである。

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んでその先蹤を繼がねばならぬ。賴山陽は未だ志學の齡にも達しなかつた時に、

十有三春秋。逝者已如水。天地無始終。
人生有生死。安得類古人。千載列青史。

と歌つた。古來の偉人が少年・青年の時よりして漸く發達した經路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して感憤興起したの

孟子
名は軻
支那周代の大賢
「孟子」七篇はその著である
聖人は百世の師なり
孟子の盡心下篇に見えてゐる

に基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、この情の生ぜぬものは、その志多くは低劣で、その行多くは鄙陋である。吾人は前代の偉人に活理想を求めて、こゝに向上志氣を振ふことが出來るのである。志氣が振つて、こゝに向上發展の途に就くのである。

古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つてその背後の力となつてゐるものもある。それで偉人を學ぶ者が、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。しかし偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益々これを雄偉に發揮することが出來、凡庸な者は、その人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠これなり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫

伯夷
支那殷末の高士
孤竹君の長子
叔齊の兄

柳下惠
本名は展禽
支那周代の高士

も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなし」と言つた。偉人を學ぶべき者は獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て高上の生活に進むのである。

且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられた者が、他日巍巍として衆目を驚かすやうな發展を爲し得たことが、少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列擧した維新前後の六偉人のごときは、何れも皆微賤の士であつた。南洲、特に海舟の如きは、眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰、景岳の如きは、生來虛弱多病であつた。南洲

王侯將相
壯士死セズンバ即チ已ム。死セバ即チ大名ヲ舉ゲンノミ。王侯將相寧ゾ種有ランヤ。(史記、陳勝世家)

顏淵
名は回
支那周代の大賢
孔門十哲の首
世に亞聖と稱せられてゐる

舜何人ぞ
顏淵曰ク「舜何人ゾ、予何人ゾ。爲ス有ル者亦此ノ若シ。(孟子、滕文公上篇)

の如きは、少時極めて魯鈍といはれたものである。松菊、甲東の如きも、少時は意氣が壯なのみで、特に英才の煥發した譯ではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等の事を思ふと、「我も人なり、彼も人なり」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。「王侯將相寧ぞ種あらんや」といひ、「英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるもののみ」といつたのも無理ではない。顏淵は「舜何人ぞ、予何人ぞ」といつた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。今や我が國は世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業に於て英偉なる人物を要することは甚だ急なのである。今日の多數青年の中、

誰かよく前英に續ぎ、來者に先だつて大業を爲すであらうか。偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命がその人をして偉人の名を成さしむるに至らしめずとも、我として最高の發展を爲し得たならば、人生の目的はこゝに達せられたといふべきではあるまいか。（青年修養訓）

橋田邦彥
生理學者
醫學博士
元第一高等學校
長兼東京帝國大
學教授
文部大臣
明治十五年（一八八二）鳥取市生

八　自他一如

橋田邦彥

我が國の學術も非常に進歩した。吾々の先人が基礎をつくつてくれたからである。吾々はこの業績、この努力に對して大いなる感謝を拂ふと同時に、大いに覺悟しなければならないことがある。この基礎の上に大きなものを建てることが吾々後進の雙肩に負はされた權利であり、義務である。小さいものにしても、建てるのは建てるのであり、學問の進歩ではあるが、それは單に一部の義務を果すだけに過ぎない。吾々は與へられたる權利を主張し、出來るだけ大きなものを建設して、その義務を十分に果さなければならない。大きなものを建てる權利が與へられて居るのであるから、飽くまで大きなものを企圖すべきである。これによつて始めて先人の努力に報ゆる所以のものが完うされるのである。大きな建物を建設するには、先輩が作つてくれた固い基礎の上に、先づ堅牢な鐵骨が組上げられなければならない。吾々はこの鐵骨を組上げなければならないのであるが、學問研究に於ては、組上げる者自らが鐵骨とならなければならない。ところでこの鐵骨たるや、建物が出來上るときは全然その姿を沒しその影を潛めてしまふものである。言換へ

れば、吾々の場合にあつては自己を全然沒却しなければならない。自己の血と肉とを建物の中に埋沒しなければならない。自己が全然沒却されると自覺しながら、敢へてその役を果さうとする人がなければならない。昔は大きな建物をつくるときに人柱の犧牲を敢へてした。その迷信は笑ふべきものであるが、吾々が我が國の學術を建設しようとするには人柱が入用である。何等かの意味に於て、犧牲的精神を發揮實現するものがなければ、吾々は先人の業を繼ぐことは出來ない。先人の努力よりも尙一層の努力を以てして、始めて先人の業を繼ぐことが出來るのである。殊に我が國に於ては、偉大なものを出來るだけ急速につくり上げる必要がある。百年、二百年の古い歷史を持つ大學の多數にある歐羅巴の諸國とは、大いに事情を異にすることに着眼しなければならない。何時までも歐米の學者の氣分を眞似て居るのでは、言換へれば彼等と同一の步調を取つて居たのでは、何時までもその後塵を拜するより外はないであらう。

自己を沒却するといふのは、自己の精進が人に認められんことを望まないことである。自己の精進に對して所得を求めないことである。尙進んでいへば、努力の成果の成るか、成らざるかさへも考へないで、只管精進することである。自己に所得を求める氣持があれば、一も二もなく早く建物をつくりあげ、その表面の裝飾となりたくなるであらう。東京の復興を見ると、到る處木筋セメント塗りのいかゞはしい建物がある。これも世態人情その他の發露で已むを得ないことであらう。しかし多數

の建物の中には、長い未來に亙つて不滅的な大建築も少くはない。それらの大建築が不滅的であるのは、勿論その全體としてではあるが、中に姿を冥藏して居る堅牢なる鐵骨のあることを忘れてはならない。この大建築を見る人、これを用ふる人が、所謂「見て見ず」、「用ひて知らず」に居るのは少しも差支はない。鐵骨が露出して居るやうな建物では實際仕方のない話である。認められると否とは全然別として、大いなる建物にはこの隱れたる大きな力が必要である。古い表現を用ふれば、緣の下の力持が必要である。緣の下の力持といふ俚諺は功利的嘲笑の意に用ひられて居るのであるが、實際に於ては、緣の下の力持があればこそ、家が支へられて居るのである。この鐵骨、この力持となることに、自己の偉大さを認める人が一人でも多數にあること

を希望する。一度基礎が出來、鐵骨が組上げられゝば、後の壁塗りは、勿論努力も必要であり、特殊の技能も必要であらうが、さほど困難なことではない。吾々は先輩に報ゆる爲に、後進を幸福ならしめる爲に、先づ自己を沒却せしめなければならない。かくして先輩と吾々と後進とが一體にならなければならない。總じて吾々の知識といふものがどれだけ自分固有のものであるか。考方によつては、生れ落ちるから死ぬまで、悉く他から與へられたものに過ぎないともいへる。自己の意見とか自己の學說とかいつても、先人・同僚・後進の努力を背景としてのみ意義をもつものである。故に學者は先づ自己の周圍前後に對して自己を主張するよりは、先づこれに對して感謝することを務むべきである。これは要するに、自己を沒却せしめることである。

自己を沒却すれば自力と他力とが渾然一如となる。その・とき、吾々はたゞ神佛に歸依し感謝するだけである。（碧潭集）

九　神無月の頃

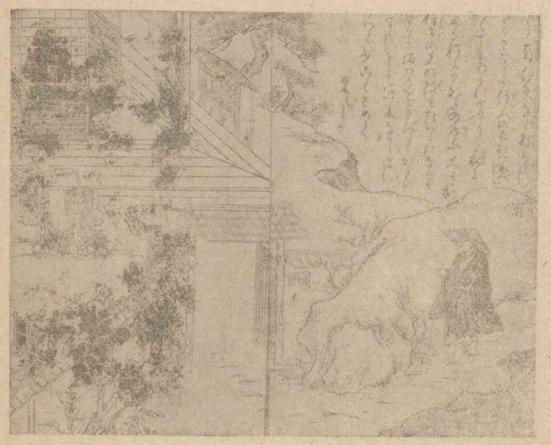
兼好法師

柑子の木

兼好法師
俗名吉田兼好
吉野朝時代の文學者・歌人
正平五年（一三一〇）寂
年六十九
栗栖野
今の京都市東山區山科町栗栖野

神無月の頃、栗栖野といふところを過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

高名の木のぼり



繪本徒然草
西川祐信筆

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて高き木にのぼせて、梢を伐らせしに、いとあやふく見えしほどは言ふこともなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな、心しておりよ」とことばをかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなむ。いかにかくはいふぞ」と申し侍りしかば、そのことに候。目くるめき枝あやふ

きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて必ず仕ることに候」といふ。

あやしき下蔦なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難きところを蹴出してのち、やすく思へばかならず落つとはべるやらむ。

懈怠の心

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なくこの一矢に定むべしと思へ」といふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事に亙るべし。

道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。況や一刹那のうちにおいて懈怠の心あることを知らむや。何ぞ唯今の一念において直にすることの甚だ難き。（徒然草）

一〇　案山子

よつぴいてひようと放さぬ案山子かな

手紙には狸臺には鯉を載せ

雷の鳴る時ばかり樣をつけ

手の甲へ餅をうけとる煤はらひ

轉寐の顏へ一册屋根にふき

隣へも梯子の禮にあやめ葺き
おさへればすゝきはなせばきり〳〵す
迷惑な顏は祭で牛ばかり
本降になつて出てゆく雨やどり
福祿壽十人前の頭痛がし
泣く〳〵も良い方をとる形見わけ
毎夜出て人をつかんで食ふ按摩
淸盛の醫者ははだかで脈をとり
夜が明けて狩場々々へ外科を呼び
武藏坊とかく支度に手間がとれ
義貞の勢はあさりを踏みつぶし

龍居松之助
歷史家・造園家
東京高等造園學校長
明治十七年(一八八四)東京生

一一　日本の庭園

龍居松之助

德川時代三百年來の鎖國政策は、明治維新の後開國主義に改められ、歐米の文化は日に月に我が國に輸入せられて、日常生活の上にもその影響著しく、明治初年より二十年ばかりの間は、歐米の風俗そのまゝが我が國にも採入れられるのではないかとさへ思はれる程、歐米文化謳歌の時代であつた。隨つて建築も、この新しき生活樣式に適應すべきものが要求せられ、官公衙は勿論、貴族の邸宅には、廣間に椅子・卓子を置いて歐米風の生活に便ならしめ、室內の裝飾などにも、所謂舶來物が歡迎せらるゝに至つた。

かういふ傾向は相當永い間續いたのであるが、我が庭園は未だ容易に江戸時代のもの以上に變らなかつた。たゞ玄關前の馬

上野公園
東京市下谷區に在る

淺草公園
東京市淺草區に在る

芝公園
東京市芝區にある

寛永寺
天台宗の關東總本山
山號は東叡山
東京市上野公園內に在る
寛永四年(一三八七)草創

淺草寺
天台宗の名刹
山號は金龍山
大化元年(一六四五)草創

車廻しなどが何處の邸宅にも造られ、歐米風の噴水勾欄などがこゝかしこに造られる程度に過ぎなかつた。

ところが、明治時代に最も注目すべきは公園の發達で、これは確に歐米各國に學んだものである。けれども最初は從來の社寺の境內などを公園と指定したまでで、近代風の公園として新しく計畫せられたものではなかつた。例へば上野公園にせよ、淺草公園にせよ、芝公園にせよ、それは昔ながらの寛永寺境內であり、淺草寺境內であり、

芝公園

增上寺
淨土宗の大本山
山號は三緣山
東京市芝公園內に在る
明德四年(一三九五)草創

日比谷公園
東京市麴町區に在る

增上寺境內であるに外ならぬ。その築造の最初から近代的公園としての計畫の下に造り上げられたのは恐らく日比谷公園であらう。同公園は明治三十六年六月一日の開園であるが、その計畫は大分以前からあつたらしく、樣式について種々議論の末、ともかく歐米風の地割を有する新時代にふさはしいものとして、音樂堂なども出來、當時としては目新しいものであつた。

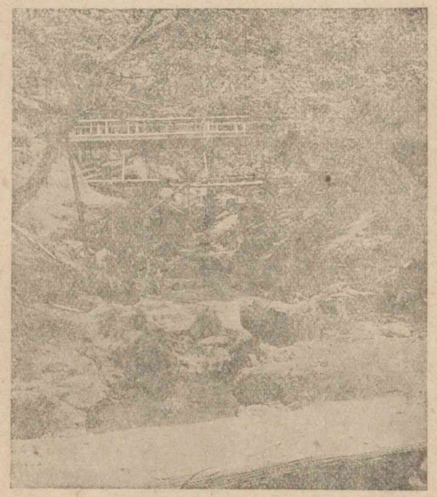
日比谷公園

日比谷公園は右の如く、江戸時代の庭園とは全くその趣を異に

せる地割を有し、平面的にこれを見れば外國の公園と甚だ相似たものであつたが、元來造園は材料や手法の關係上、如何に歐米風を摸倣しようとしても、建築の如く歐米風そのまゝを摸し難いので、局部的にこれを見れば、石組法も植栽法もすべて江戸時代のものそのまゝであるといつてよい。要するに、地割のみは嚴格なる歐米風でありながら、細部の手法は殆ど日本在來のものである。たゞ池に設けられた噴水や、園内に配置せられた小建築や、四阿や、腰掛や、照明裝置の類が歐米風なるがために、當時の人々には甚だ目新しかつたものであつたらうと思ふ。

我が國に於ける現代風の最初の公園は日比谷公園である。その後大都市に無數の公園が造られた。殊に大正十二年九月關東地方大震災後、帝都復興に伴なつて東京市に大小多數の公園が出來た。これらの公園は日比谷公園に比して一層歐米風の地割と建設物とを有するものとなつた。就中面積の小なるものに於て、特にその甚だしきを見るのである。

有栖川宮記念公園
高松宮家御下賜の土地に造營した公園
東京市麻布區に在る



有栖川宮記念公園

ところが、こゝに興味あることは、少しく面積に餘裕のある敷地で、多少でも地形に起伏など變化のある場所に於ては、日本人固有の趣味として、やはり日本風の景觀を求めるやうになり、大公園の一部に純日本風の部分をも附加する傾向が現れて來たことである。東京市麻布なる有栖川宮記念公園の如き、極めて小部分を

除いては、公園の大部分が日本風の庭園で、市民が逍遙するに最も適してゐる。つまり歐米萬能の時代から漸次日本本來のものを再檢討し、そこに優れたる多くのものを見出すやうな時代となつたのである。

單に公園について見ても、明治維新以來かくの如く變遷したのであるが、一般の庭園にも亦同じやうな關係が發見される。即ち明治時代の終に近い頃から大正の初年にかけては實に立派な歐米風の建築や庭園が造られたが、これらは十分理解ある技術者により、最も忠實に造られたので、そのあるものの如きは、一見歐米のものに比して少しも遜色なき優秀なもので、純歐米風ともいふことが出來る。然るに建築はともかくも、庭園に至つては前記公園に於けると等しく、地割や建設物以外、容易に歐米風を採入れ難く、却つて最新の歐米風建築に對して、日本風庭園を如何に調和せしむべきかといふことの研究が進められるやうな有樣となつた。しかし海外より輸入せられた造園上の新しい材料や手法はこれを拒むことなく、日本庭園に盛に採入れてゆくのである。この寛裕なる態度は昔ながらの日本人であると思ふ。それ故歐米風のテレースやプールや噴水や彫刻や腰掛や四阿など、これを日本風の庭園内に巧に織込み得るやうになり、今日に於ては寧ろ新時代の日本庭園にこの種の新しい要素を材料として取扱ふ傾向になつたのである。

（庭園と日本精神）

テレース
高壇
プール
堀池

高橋箒庵
名は義雄
新聞記者
實業家・茶人
水戸の人
昭和十二年歿
年七十七

一三　作文趣味

高橋箒庵

正德
中御門天皇の御代（二七一―二七五）

大井廣
水戸藩の史臣
伊藤仁齋の門人
京都の人
寶永四年（二七〇七）
彰考館總裁となつた
時に年三十二
享保八年（二七二三）
歿
年五十八

肅公
德川綱條
水戸德川家第四代の藩主
享保三年（二七一八）
卒
年六十四

文藝に關する趣味の極めて多端なる中に、作文趣味ほど高雅にして且深妙なるものはなからう。こゝに作文とは、普通の文章に限らず、漢詩・國風、その他各種の文を包含していふのである。

余は舊水戸藩士の家に生れたので、少年の頃より大日本史の編纂に從事した鴻儒・碩學の苦心談を傳聞する機會が多かつた。而して彼等が記事又は飜譯に沒頭して、一字一句にも心血を搾り、研鑽討覈の末、始めて會心の文字を得た時の得意は、果して如何であつたらう。正德の頃、彰考館總裁であつた大井廣が、肅公に代つて大日本史の序文を作つた時、彼が平生武藝を好んで文筆に親しまなかつたので、館員一同竊にこれを危んだが、序成るに及んで、

先人十八歲、讀伯夷傳、蹶然有慕其高義。

安積澹泊
名は覺、水戸藩の史臣
彰考館總裁
朱舜水の門人
元文二年（一七三七）
卒
年八十二
贈正四位

筆蹟
大日本史叙
先人十八歲讀伯夷傳
蹶然有慕其高義撫卷
歎曰不有載籍寘夏之
文不可得而見不由史

大日本史叙文

と起し得て凜然、氣風霜を挾み、老學安積澹泊と雖も猶後に瞠若たらざるを得なかつたので、皆その大手筆に駭服したさうだが、大井が「先人十八歲云々」の起筆を思ひ得た時の心境は、蓋し手の舞ひ足の踏む所を知らざる程であつたらう。何事によらず苦しんだ擧句出來上つたものはその成績が面白い。古人が「愈〻窮して而る後に工なり」と言つたのも、亦この極致を道破したものであらう。唐の賈島が、

鳥宿池邊樹。僧敲月下門。

の二句を得たる時、敲と推との取捨に思ひ迷うて慘澹たる苦心

賈島
唐の詩人

都良香
平安朝時代の儒者
元慶三年（一五九）卒
年三十六

秋風ぞ吹く
都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の關
（能因法師）

鳴立つ澤
心なき身にもあはれは知られけりしぎたつさはの秋の夕暮
（西行法師）

を費した挿話が推敲といふ二字の出典となつたのも、本朝の都良香が月夜羅城門を過ぎ、所作の一句「氣霽風梳新柳髮。」と吟じた時、鬼神が樓上より嘆賞の聲を發して、氷消浪洗舊苔鬚」と相和したといふ傳說も、亦皆作文に對する熱狂的趣味を表現したものであらう。

總じて文學極盛の時には、文人韻士相競うて名譽の佳作を得んと欲し、非常の眞劍味を以て嘔血苦心する、その結果として古今の秀句が出て來るのである。平安朝時代などには、作者の意氣込も並々ならず、歌合に失敗して憂心忡々疾を成す者があれば、彼の「秋風ぞ吹く白河の關」の一句を有意義にせんとして、兒戲に類する旅行の狀を裝うた者もあり、妻子珍寶を弊履の如く棄去つた西行法師ですら、「鳴立つ澤」の一首が千載集に載せられしや

千載集
勅撰集の一
藤原俊成が後白河法皇の院宣によつて撰進したもの

藤原俊成
歌人
千載集の撰者
元久元年（一六〇四）卒
年九十一

定家
歌人
新古今集・新勅撰集の撰者
仁治二年（一二〇一）卒
年八十

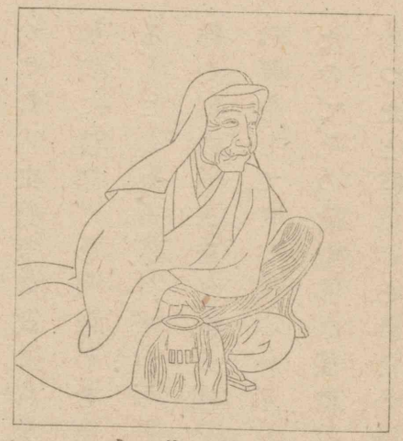
否やを氣遣つて、わざ〳〵上洛の途中、その選に洩れたと聞いて、すごすご關東へ引返したといふ逸話もあつて、當時文藝家の間に作文趣味が如何に濃厚であつたかを窺ふに足る。

この外、藤原俊成が平居和歌を作るに古淨衣を着、桐火桶を抱き、凝然靜坐して曾て情容を示さなかつたので、その歌も亦雅淡深遠の態があつたと言傳へられ、その子の定家は室の南面を洞開して襟を整へて端坐し、平常至尊の前にあるが如く

藤原定家
下村觀山畫

元祿七年
東山天皇の御代
（一六九四）
去來
向井氏
蕉門十哲の一
寶永元年（一七〇四）
歿
年五十四
野明
蕉門の俳人
大堰川

にしたので、その歌も亦氣格が高妙であつたといふことなど、當時の作家が何れも文字を以て生命となし、平常これに對する用心の極めて深切なりし態度を觀るべきものであらう。



藤原俊成
集古十種

降つて德川時代文運勃興の際に於ても、各方面の文人韻士がその錦心繡腸を搾り盡くして前人未發の名句を得んと努力したことは、藤原時代に劣らぬが、彼の十七字の俳句が平民文學として天下に横流してより、その字數の少きだけそれだけ却つて多くの洗煉を要する譯で、俳人者流が一字一句にも死力を盡くした苦心談は、枚擧に遑がな

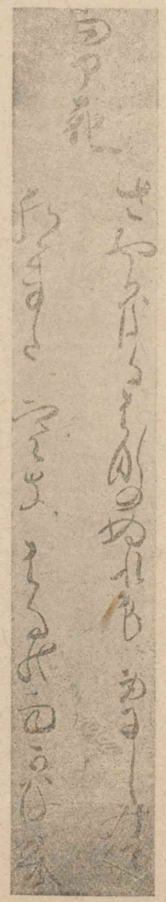
山城國桂川の上流
清瀧
大堰川の支流
園女
蕉門の俳人
享保十一年（一七二六）歿
年七十四
古池や
古池や蛙飛びこむ水の音
枯枝に
枯枝に烏のとまりけり秋の暮
夏草や
夏草やつはものどもが夢のあと
塚も動け
塚も動けわが泣く聲は秋の風
小出粲
歌人
御歌所寄人
明治四十一年（一九〇八）卒
年七十六

い。芭蕉が元祿七年十月六日、即ち臨終の六日前、枕頭に侍した去來に向つて、「我が曩に野明に示した『大堰川波に塵なし夏の月』と、清瀧で詠んだ『清瀧や波にちりこむ青松葉』と、園女に贈つた『白菊の目にたてて見る塵もなし』の三句は意匠の相類する嫌あれば、前二句を廢して白菊の一句のみを留むべきか、汝の意如何」と問はれたので、去來は師翁が名のため道のため死に至るまで一二句の取捨をも忽にせざるその執心の深切なるを思うて、感涙袂を濕したといふ美談があるが、この一事に依つて推想するに、芭蕉が「古池や」「枯枝に」「夏草や」「塚も動け」等の名句を得た時の興趣は果して如何。孤獨なる彼の一生も、この趣味あるに依つて非常に幸福であつたらうと思ふ。

明治時代に於て最も作文趣味に富んだ一人は、我が師小出粲翁

である。翁は天才肌の歌人で「和歌は難題ほど却つて詠みよいものだ」といひ、又「人には自然の歌口がある。今若し同一人の歌百首中より一首の歌口をも見出さなかつたら、その人には最早歌を詠ませぬがよい」と言はれたが、その代り弟子に秀吟が出來

筆蹟
雨中花
さやかなるはなのぬれ色身にしみて朝また寒きはるの雨かな
桑



小出粟隈

た時には、非常に喜んでこれを稱揚する風があつた。或時、人のために螢を詠じた自作の詩を揮毫して、誤つて光の一字を落した。翁は一考の後、傍に

なほざりにかきけちたりと思ひしは光かくして飛ぶほたるなり

山縣含雪
名は有朋
陸軍大將
内閣總理大臣
樞密院議長
公爵
大正十一年卒
年八十五

常磐會
井上通泰を中心とし山縣公をはじめ若干の同志で設けた歌の會

越後口の戰陣
明治元年(一八六八)征東大總督に隨つて北陸道方面に向つた戰

と一首の和歌を書添へたので、却つて面白き一幅となつたことがあつた。

又同じころの素人側で作文趣味に富んだ一人は山縣含雪公であらう。或年余が自身の雅號に因み、常磐會より箒といふ課題を出して貰つた時、公の出詠なる、

たまさかに朝ぎよめするをとめごが持てる箒の重げなるかな

といふのが滿點になつたと聞くや、平常謹嚴そのもののやうであつた公は、廊下に飛出して貞子夫人を呼び、「滿點だ〳〵」と子供の如く打喜ばれたといふことだが、平常和歌を尊重した公の氣分より推想すれば、彼の越後口の戰陣で

仇まもるとりでのかゞり影ふけて夏も身にしむ越の山風

尾崎紅葉
名は德太郎
明治時代の小説家・俳人
明治三十六年(一九〇三)歿
年三十七

膏肓
膏は心臓の下の微脂
肓は横隔膜の上の薄膜
針や藥のとどかぬ處

間貫一
「金色夜叉」の主人公

の名歌を得た時の喜は、或は當時の苦戰に打勝つた滿足よりも更に遙かに大きかつたかも知らぬ。

明治時代の小説家では、尾崎紅葉が最も作文趣味に富んでゐた。明治二十九年頃かと思ふ、余が三越呉服店の革新に與つて本邦百貨店の先鞭を着けたとき、「花衣」といふ雜誌の原稿を紅葉に頼んだことがあつた。その頃紅葉は、彼の「金色夜叉」の執筆中であつたらしく、「自分は晝間家庭の紛雜を厭ひ、午前二時より起出でて執筆するのを常とするが、この非衛生的習慣の結果遂に不治の胃病を醸し、御覽のとほり血色が甚だ勝れない次第である。」といつた。その面貌を熟視すれば、瞼の下に青黑い斑點を現じて、病魔の深く膏肓に入つてゐる有樣、まことに氣の毒に堪へなかつた。しかし彼が深更幽窓の下に坐して、熱海の月夜に間貫一

鹽原
栃木縣鹽谷郡鹽原温泉

西那須の驛
栃木縣那須郡大田原の西にある東北本線の停車場

那須野が原
那須火山の南東麓の廣い裾野

が口走つた彼の名文句を綴り了つたときの愉快を想像すれば、彼が短生涯に於て滿喫した作文趣味の分量は、蓋し何人よりも豐饒であつたらうと思ふ。（難波先生古稀祝賀知友新稿）

一三　鹽原

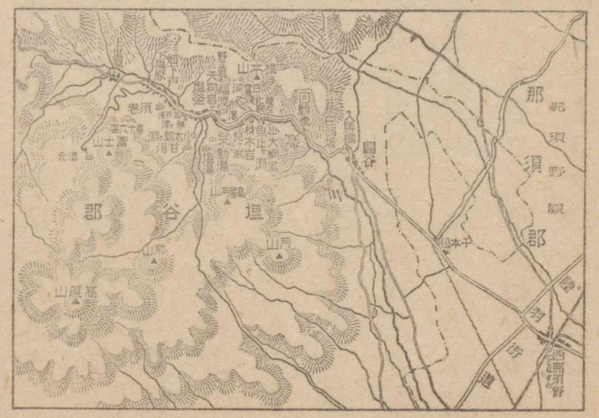
尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我はかはらざるその悒鬱を抱きて、やるかたなき五時間の獨り旅に倦疲れつゝ、はじめて西那須の驛に下車せり。直に西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて、行くほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに淙々の響ありて、これにかゝれる

を入勝橋となす。

輒ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陷りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を開き、愈〻登れば遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。

道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑



鹽原附近

の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと、見すてがたし。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全谿にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑〻鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片嶇にして、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥硏に瑠璃末を碎くに似たり。

先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧、左馭の嶮は古りて白雲

洞は朗かに、布瀑瀧が鼻・材木岩・五色岩・船岩なんどと眺め行けば、鳥居戸、前山の翠、衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

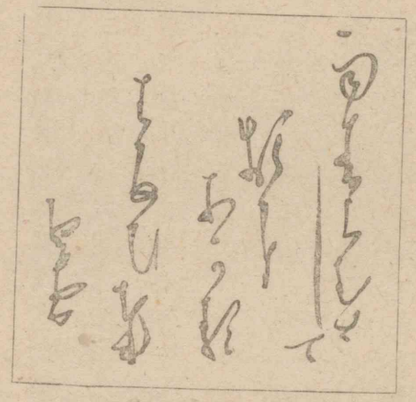
途すがら前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又この邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み、處の名を問へば、不動澤といふ。

盛原白雲洞附近

遙かに望めば、行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさるゝ屏風巖、地を拔く何百丈と見あぐる絶頂には、ばら〳〵と松も危く立ちすくみ、幹竹割に割放ちたる斷面は半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ」と、はるかにも車夫は案内す。足にまかせてかの巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。裕に百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐しげにうづくまりて、老木の陰を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜な〳〵天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「その昔蒲生氏郷この處に野立せしことあるに因りて野立石と申す」と、例のが說出す。

蒲生氏郷
戰國時代の武將
會津（百萬石）の
城主
文祿四年（三百年）
卒
年四十

筆蹟　雨來らむとして頻にあかるはなひ哉　紅葉



尾崎紅葉筆

卒ゐたる車に乘りて急ぐ。甘湯澤・小太郎が淵など思ひやりつつ、鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。一村十二戸、溫泉は五箇所に湧きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南にあたりて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。我はこの繪を看

るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消して理むる方なくかき亂されし胸のうち、藹然として頓に和らぎ、恍然としてすべて忘れたり。まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遲かりし。山の麗しといふも壞の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として拔くべからざるわが半生の痼疾はいかで壞と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚のものなれや。見よ見よ、木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ谿も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、雞の啼く音も、空の色も皆自ら浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と輕く、心はこの水と淡し。希はくは今よ

筆蹟
かへらしとかけてそちかふあつさ弓矢立たはさみかといてすわれは　親

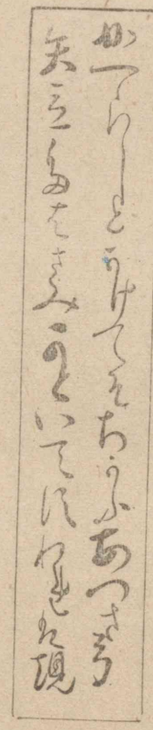
伊藤左千夫
歌人
千葉縣産
大正二年歿
年五十

りかくの如くにしてわが生を終へんかな。（紅葉全集―金色夜叉）

一四　水莖

正岡子規

水莖のふりにし筆のあと見ればいにしへ人はよく書かれけり



正岡子規筆

霜おほひのわらとりすつる芍藥の芽の紅に春のあめふる

伊藤左千夫

鶴鴿の來鳴くこのごろ藪柑子はやいろづきぬ冬のかまへに

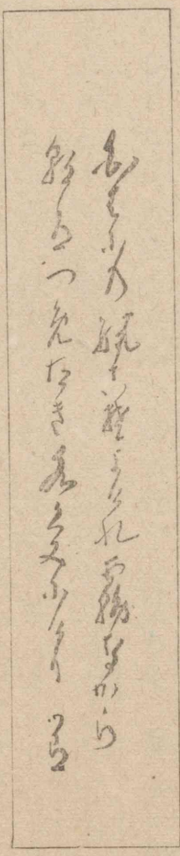
長塚節
歌人・小說家
茨城縣生
大正四年歿
年三十七
筆蹟
白はにの瓶こそよけれ鶯なから朝はつめたき水くみにけり　節

島木赤彥
本名久保田俊彥
歌人
長野縣生
大正十五年歿
年五十一

に裏戸出でて見るものもなしさむ〳〵と曇る日傾く枯葦のうへに

長塚節

春風の杉村ゆすりさわたればしづくするごと杉の花落つ



長塚節筆

おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり

島木赤彥

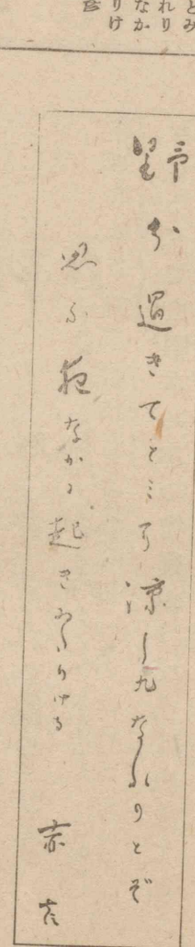
さゝやかなる湖をめぐりて日あたれる芝山の道いく筋も

筆蹟
野分過きてとみに涼しくなりとぞ思ふ夜なかに起きゐたりける　赤彦

齋藤茂吉
醫家・歌人
醫學博士
帝國藝術院會員
明治十五年（一八八二）山形縣生

土屋文明
歌人
明治二十四年（一八九一）群馬縣生

見ゆ
このまひる炭にまじれる古き葉のけぶる匂をさびしみにけり



鳥木赤彦筆

齋藤茂吉

稚くてありし日のごと吊柿に陽はあはゝとさしゐたるかも

うら〳〵と天に雲雀は啼きのぼり雪斑なるやまに雲ゐず

土屋文明

白砂にきよき水ひき植ゑならぶわさびしげりて春ふけにけり

山藤はくさはらにして咲きにけり人や行きけむ葉のこかれたる

一五　競の瀧口

あくる十六日、高倉の宮の御謀叛起させ給ひて三井寺へ落ちさせ給ふぞやと申す程こそありけれ、京中の騒動なのめならず。そも〳〵この源三位入道頼政は、年頃日頃もあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀叛をば起されけるぞといふに、平家の次男宗盛の卿の不思議の事をのみし給ひけるによつてなり。されば人の世にあればとて、すゞろに言ふまじき事を言ひ、すまじき事をするは、よく〳〵思慮あるべき事なり。

十六日
高倉天皇の治承四年（一八〇）五月
高倉の宮
以仁王
後白河天皇の第四皇子
治承四年源頼政にかたらはれて平氏に抗し給ひ宇治の平等院で流矢に中つて薨じた
御年三十
三井寺
園城寺の別名
大津市の西北部にある天台宗の名刹
源三位入道頼政
兵庫頭仲政の子
治承四年以仁王を奉じて平氏に抗し敗れて宇治の平等院に自殺した
年七十七

宗盛の卿　内大臣平宗盛
清盛の次子
寿永四年(一一八五)壇浦に捕へられ近江の篠原で斬られた
年三十九

仲綱　源頼政の長子
治承の役に父と共に宇治の平等院に自殺した

たとへばそのころ三位入道の嫡子伊豆守仲綱のもとに、九重に聞えたる名馬あり。鹿毛なる馬のならびなき逸物、乗走り、心むけ、世にあるべしともおぼえず、名をば木の下とぞいはれける。宗盛の卿使者を立てて、「聞え候名馬を賜はつて見候はばや」とのたまひ遣はされたりければ、伊豆守の返事には、「さる馬を持つて候ひしを、この程あまりに乗りつからして候程に、しばらくいたはらせんがために、田舎へ遣はして候」と申されければ、「さらんには力及ばず」とて、その後は沙汰なかりけり。多く並みゐたる平家の侍ども、「あつぱれその馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、けさも庭乗りし候ひつる」など口々に申しければ、「さては惜しむごさんなれ、にくし、乞へ」とて、侍して馳せさせ、文などして、一時が中に五六度、七八度など乞はれければ、三位入道これを聞き、伊豆

六波羅　平宗盛の邸

守に向つてのたまひけるは、「たとひ黄金を以てまろめたる馬なりとも、それほど人の乞はんずるに、惜しむべきやうやある。その馬速に六波羅へ遣はせよ」とこそのたまひけれ。伊豆守力及ばず、一首の歌を書きそへて、六波羅に遣はさる。

こひしくば來ても見よかし身に添ふるかげをばいかが放ちやるべき

宗盛の卿、まづ歌の返事をばしたまはで、「あつぱれ馬や、馬はまことによい馬でありけり。されども餘りに惜しみつるが憎さに、主が名乗を金焼にせよ」とて、仲綱といふ金焼をして、厩にこそ立てられけれ。客人來つて、「聞え候名馬を見候はばや」と申しければ、「その仲綱めに鞍おけ、引出せ、乗れ、打て、張れ」なんどぞのたまひたる。伊豆守この由を傳へ聞きたまひて、「身にかへて思ふ馬な

れども、權威について取らるゝさへあるに、剰へ天下の笑はれぐさとならんずることこそやすからね。と大いに憤られければ、三位入道のたまひけるは、「なんでふ事のあるべきと思ひ侮つて、平家の人どもが、かやうのしれごとをするにこそあんなれ。この儀ならば命生きても何にかはせん。便宜を窺ふてこそあらめ。」とのたまへども、私には思ひも立たれず、高倉宮を勸め申されけるとぞ、後には聞えし。

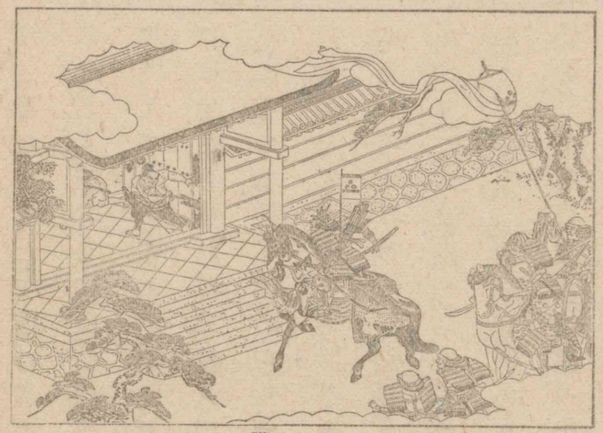
さる程に同じき十六日の夜に入つて、源三位入道頼政、嫡子伊豆守仲綱、次男源大夫判官兼綱、六條藏人仲家、その子藏人太郎仲光以下混甲三百餘騎、館に火をかけ燒きあげて、三井寺へこそ參られけれ。こゝに三位入道の年頃の侍に、渡邊源三競の瀧口といふ者あり。馳後れて留りたりけるを六波羅へ召して、など汝は

相傳の主三位入道が供をばせで留つたるぞ。と宣へば、競畏まつて申しけるは、「日頃は、自然の事も候はば、眞先かけて命を奉らんとこそ存ぜしか、今度は如何候ひつるやらん、かくとも知らせられざりつる間、留つて候。」と申す。宗盛の卿、「これにも亦兼參の者ぞかし。先途後榮を存じて、當家に附いて奉公せんとや思ふ。又朝敵頼政法師に同心せんとや思ふ。ありのまゝに申せ。」とこそ宣ひけれ。競涙をはら〳〵と流いて、「假令相傳の好候とも、いかんか朝敵となれる人に同心をば仕り候べき。只殿中に奉公致さうずる候。」と申しければ、大將「さらば奉公せよ。頼政法師がしけん恩にはちつとも劣るまじきぞ。」とて入りたまひぬ。

朝より夕に及ぶまで、「競はあるか。」「候。」「あるか。」「候。」とて伺候す。日もやう〳〵暮れければ、大將出でられたり。競畏まつて申し

けるは「誠や、三位入道は三井寺にと聞え候。定めて夜討などもや向けられ候はんずらん。三位入道の一類渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん。心にくうも候はず。罷り向つて選討なども仕るべき。さる馬を持つて候ひしを、この程、親しい奴めに盗まれて候。御馬一疋下し預り候はばや」と申しければ、大將「尤もさるべし」とて、白葦毛なる馬の、南鐐とて祕藏せられけるに、善い鞍置いて競に賜ぶ。賜ばつて宿所に歸り「はや日の暮れよかし。三井寺へ馳參り、入道殿の眞先かけて討死せん」とぞ申しける。日もやう〳〵暮れければ、妻子どもをば彼處此處に立忍ばせて、三井寺へと出立ちける心の中こそ無慚なれ。

狂紋の狩衣の菊綴大きらかにしたるに、重代の着背長、緋絨の鎧着て星白の兜の緒をしめ、嚴物作の太刀を佩き、二十四さいたる



競の瀧口
源平盛衰記圖會

大中黑の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽で矧いだりける的矢一手ぞ差添へたる。滋籐の弓持つて、南鐐に打乘り、乘替一騎打具し、舍人男に持楯脇挾ませ、屋形に火をかけ燒きあげて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には、競が屋形より火出て來たりとて犇きけり。宗盛の卿急ぎ出でて、競はあるか。「候はず」と申す。「ずは、彼奴めを手延びにして詐られぬるは。あれ追つかけて討て」。と宣へども、競は勝れたる大力の剛の者、矢繼早の手利にてあり

ければ、二十四さいたる矢にては、まづ二十四人は射殺されなんず。　音なせそ。とて、進む者こそなかりけれ。

只今しも三井寺には渡邊黨寄合つて、競が沙汰ありけり。「如何にもして、この競の瀧口をば召具せられ候はんずるものを。」と口口に申されければ、三位入道競が心を能く知つて宣ひけるは、「無下にその者捕へ搦められはせじ。　入道に志深き者なれば、見よ、只今參らんずるぞ。」と宣ひも果てぬに、競つと參つたり。「されば こそ。」とぞ宣ひける。　競畏まつて申しけるは、「伊豆守殿の木の下が代りに六波羅の南鐐をこそ取つて參つて候へ。　參らせ候はん。」とて奉る。　伊豆守斜ならず悦び給ひて、やがて尾髪を切り、金燒をして、その夜六波羅へ遣はさる。　夜半ばかりに門の内へ追入れたりければ、厩に入つて、馬どもと嚙合ひければ、その時舍人

長柄堤
今の大阪市東淀川區を流れる中津川の堤

坪内逍遙
名は雄藏
英文學者・戲曲家
文學博士
早稲田大學名譽教授
美濃國（岐阜縣）生
昭和十年歿
年七十七

驚きあひ、「南鐐が參つて候。」と申す。　宗盛の卿急ぎ出でて見給ふに、「昔は南鐐、今は平宗盛入道。」といふ金燒をこそしたりけれ。　大將、「につくい競めを切つて捨つべかりけるものを、手延びにしてたばかられぬることこそ安からね。　今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして競めを生捕にせよ。　鋸にて首斬らん。」と躍り上り躍り上り怒られけれども、南鐐が尾髪も生ひず、金燒もまた失せざりけり。（平家物語）

一六　長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて殘月淡く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。　はや分れゆく横雲や、殘んの星を一つづつ鐘が消し行くいなのめの長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黑く、有明凄き大川水逝き

片桐市正且元　賤岳七本槍の一人
秀頼の傅
慶長十九年(三七四)方廣寺鐘銘の事で幹旋甚だ力めたが淀君はその策を用ひないのみか且元を疑ひこれを殺さうとしたので居城茨木に立退いた元和元年(三七五)五月大阪城が陷つて秀頼母子が自殺したと聞き自ら劍に伏して死んだ年六十二
茨木　大阪府三島郡茨木町
南山不落　南山ノ壽ノ如ク、騫ケズ、崩レズ。(詩經、小雅、天保篇)

て歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく千草が陰の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。　片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と長柄堤に差懸る。(中略)

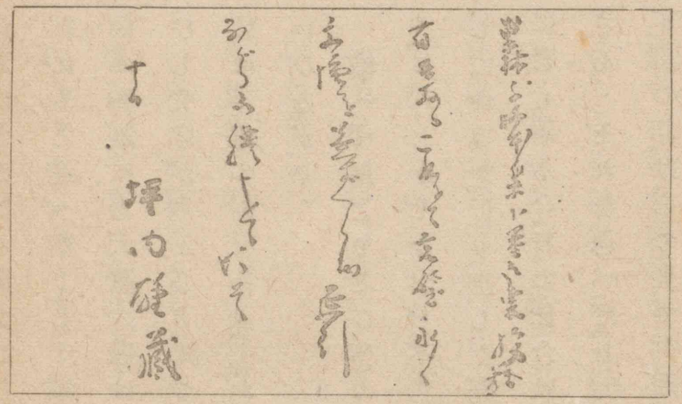
後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明方、時に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵霽れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、雞の聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る方の月すさまじき柳陰、枯葉、枝疎らにして風颯々、見る目も昏し、遠方に飄々と現るゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。　南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣。　唇齒已に亡ぶ。　今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、」

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、ゆめ聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、この

南山は終南山の略　支那周代の都なる豐鎬の南にある
加藤肥州　肥後守加藤清正　豐臣家の忠臣　贈從三位
大政所　太閤の夫人淺野氏
唇齒已に亡ぶ　輔車相依り、唇亡ビテ齒寒シ。(左傳)
須彌　妙高山と譯す



坪内逍遙筆

千姫君
德川秀忠の女
秀頼の室
毘盧舍那
梵語
光明遍照と譯す
こゝは方廣寺の
大佛を指す
前門の虎
前門ニ虎ヲ拒イデ、後門ニ狼ヲ
迎ム。
（故事瓊林）

且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。『御家長へに康かれ。』と祝ひし文字が本となり、降つて湧いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、」

泳へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循にして大事を誤り、空しく關東の罠に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合はせ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思し召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

木村長門守重成
豐臣秀頼の忠臣
名將
元和元年（一三七三）
大阪夏の陣に奮
戰して討死した
年二十一
贈正四位

在すが如く兩手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なき事どもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に、中を馳來る木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」　市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間に駈寄るくつわづら、右手におり立ち顏見合はせ、言葉はなくてそゞろにもまづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを長柄堤に留むらん。

織田入道　織田信雄常眞入道　寛永七年（三七〇）卒　年七十三
御母公　豊臣秀頼の母淀君
大野　大野治長　淀君の寵臣
渡邊　渡邊内蔵介糺　淀君の寵臣

長「最早豊臣の御社稷も愈〻末となつたるか。棟梁と頼む貴殿まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に思ひ懸けぬ珍變あり。續いて貴殿に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似げなく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。殿にても屢〻申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆泡沫。大亂破裂せん

長柄堤の訣別（劇）

九度山　和歌山縣伊都郡の山村
眞田安房守　名は昌幸　慶長三年（一三五八）卒　年六十五
幸村　眞田昌幸の第二子
大阪方の勇將　元和元年（一三七五）大阪夏の役戰死　年四十六
長曾我部盛親　元親の第四子　大阪方の勇將　元和元年大阪夏の役東軍に捕へられ六條磧で斬られた
後藤基次　基國の子　通稱は又兵衛尉　大阪方の勇將　元和元年大阪城陷るに及んで自殺した

は目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ」。長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか」。長「されば、今御城に、兵糧・金銀は乏しからず、まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり」。長「してその智謀の將とは」。市「いま九度山に隱れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來關東の跋扈を怒り、螫して世の態を窺へるを先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以ていそぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後浪々なしし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心

關東の老奸雄　德川家康

を傾け馳參ぜん。これ第一の手配りなり」。長「して又籠城となつたる嘆、敵を防がん手配りは」。市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと詐り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積置いたり。まつた港口の御車には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るともなほ支ふるに餘りあるべし」。長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり」。市「甲冑・兵具も乏しからず」。長「城は名に負ふ南山不落」。市「眞田・後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻寄すとも、」市「なか〳〵

遠水　名は守久
御宿　名は正倫
和久　名は宗是
四つ目結

社鼠　夫ノ社鼠ヲ患フ。之ヲ熏ブレバ則チ其ノ木ヲ燒クヲ恐レ、之ニ灌ゲバ則チ其ノ塗ヲ敗ルヲ恐ル。此ノ鼠ノ殺スヲ得ベカラザル所以ノ者ハ、社ヲ以テノ故ナリ。（晏子春秋）

三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」長「まつた若年には候へども、愈〻軍始りなば、我亦一方を承り、遠水・御宿・和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹飛さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。」市「ほゝ賴しし賴しし。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照らし、成行く末をかんがみれば、」長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」市「上御發明に渡らせらるれど、」長「讒佞これを蔽ふが故、」市「地の利はあれども人の和なく、」長「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし六十餘州の民草も、」市「天の時

地の利　天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ、地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ。（孟子、公孫丑下篇）
大御所　德川家康の敬稱

にや、大御所のおのづからなる德風にいつしか靡く世の有樣。」長「如何なれば、かくまでに、御運かたぶく西天の」市「有明の影薄れつゝ、」長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」市「新日、東天に昇るといふ」長「世の成行の」二人「影なるか。」是非もなき世の有樣と、入る方の月眺め入り、しばしは愚痴におちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

（中略）

二人「さらば〳〵。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人がこの世に殘す面影は、また見ぬ影とぞなりにける。（桐一葉）

大楠
楠木正成
吉野朝の忠臣
贈正一位
小楠
楠木正行
正成の長子
吉野朝の忠臣
贈從二位
笠置
京都府相樂郡笠置山
元弘元年
後醍醐天皇の御代（一九二）
主上
後醍醐天皇
叡山東坂本の合戰
元弘元年八月二十六日官軍と北條方の六波羅勢との戰
當寺
笠置寺

一七　大楠小楠

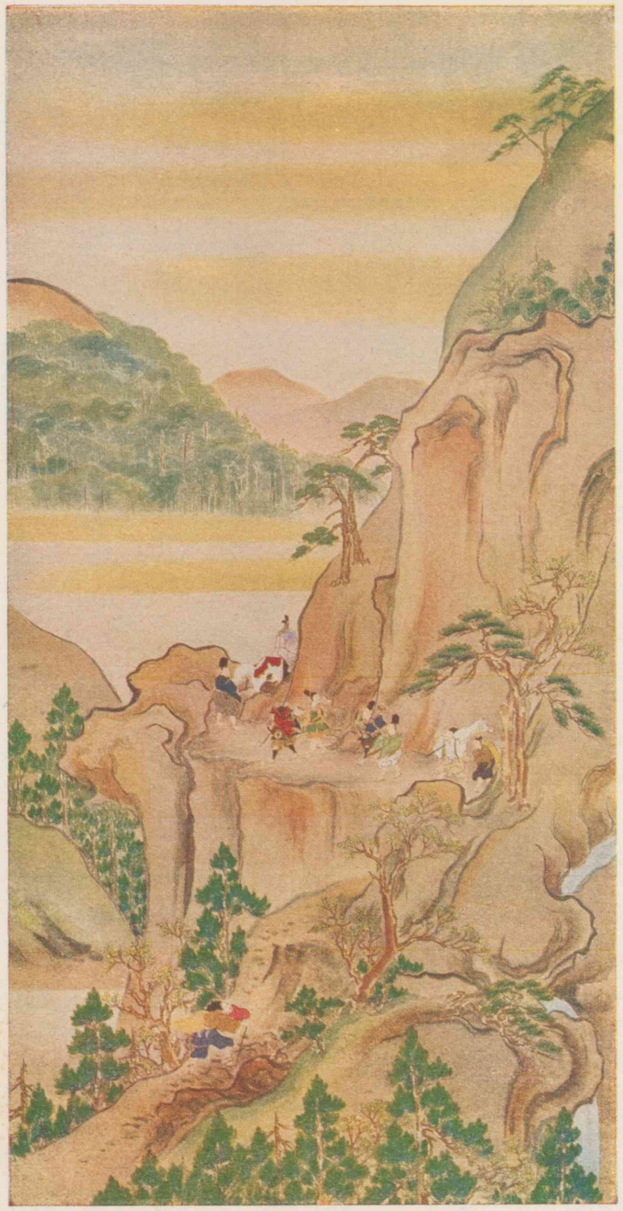
笠置の靈夢

元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸なつて、本堂を皇居となさる。始め一兩日の程は武威に恐れて、參り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山東坂本の合戰に、六波羅勢打負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて、近國の兵ども此處彼處より馳參る。されども未だ名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名は一人も參らず。この勢ばかりにては、皇居の警固如何あるべからんと、主上思し召し煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、處は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大いなる常磐木あり。綠の陰茂りて、南へ指したる枝殊に榮え蔓れり。その下に三公百官位に依つて列坐す。南へ向きたる上座に、御座の疊を

高く敷き、未だ坐したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けんための座席やらんと、怪しく思し召して、立たせ給ひたる處に、髫結ひたる童子二人忽然として來つて、主上の御前に跪き、涙を袖にかけて、「一天下の間に暫くも御身を隱さるべき處なし。

笠置の靈夢
小堀桂月畫

但しあの樹の陰に南へ向へる座席あり。これ御爲に設けたる玉扆にて候へば、暫くこれにおはし候へ」と申して、童子は遙かの天に上り去りぬと御覺じて、御夢はやがて覺めにけり。主上これは天の朕に告ぐる所の夢なりと思し召して、文字につきて御



藤房卿訪楠公　山名貫義筆

南面の德　聖人南面シテ天下ニ聽キ、明ニ嚮ヒテ治ム。(易)

日光・月光　共に菩薩の名

敏達天皇　第三十代　欽明天皇の皇子

橘諸兄　聖武天皇の重臣　左大臣　天平寶字元年(一四七)卒　年七十四

志貴　奈良縣生駒郡に峙つ山　山上に毘沙門堂がある

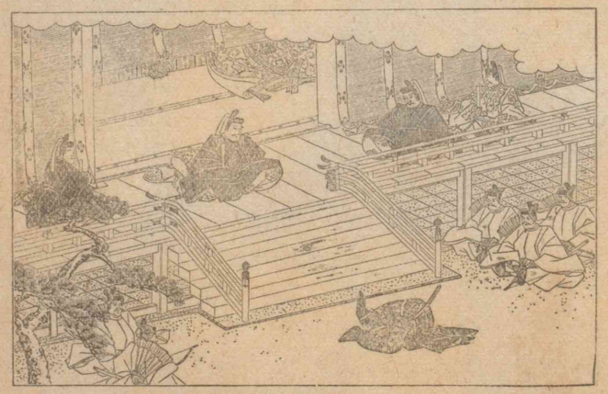
毘沙門　毘沙門天　多聞天ともいふ　佛教の四天王の一

料簡あるに、木に南と書きたるは楠といふ字なり。その陰に「南に向つて坐せよ」と二人の童子の教へつるは、朕再び南面の德を治めて、天下の士を朝せしめんずる處を、日光・月光の示されけるよと、自ら御夢を合はせられて、たのもしくこそ思し召されけれ。夜明けければ、當寺の衆徒、成就房の律師を召され、「若しこの邊に楠といはるゝ武士やある」と御尋ありければ、「近きあたりに、左樣の名字附きたる者ありとも未だ承り及ばず候。河内國金剛山の西にこそ、楠木多聞兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候なれ。これは敏達天皇四代の孫井手左大臣橘諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し。その母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣で、夢想を感じて設けたる子にて候とて、稚名を多聞とは申し候なり」とぞ答へ申しける。主上、さては今夜の

藤房卿
藤原藤房、後醍醐天皇の忠臣

夢の告これなりと思し召して、やがて「これを召せ」と仰せ下されければ、藤房卿勅を奉りて、急ぎ楠木正成をぞ召されける。

勅使宣旨を帶して、楠木が館へ行向うて、事の子細を演べられければ、正成、弓矢取る身の面目、何事かこれに過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ忍びて笠置へぞ參じける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、「東夷征罰の事、正成を憑み思し召さるゝ子細あつて、勅使を立てらるゝ處に時刻を移さず馳



正成勅問に奉答す
太平記圖會

參る條、叡感淺からざる所なり。抑、天下草創の事、如何なる謀を運らしてか、勝つことを一時に決して太平を四海に致さるべき。所存を殘さず申すべし」と勅諚ありければ、正成畏まつて申しけるは、「東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘つて天誅を致されんに、何の子細か候べき。但し天下草創の功は、武略と智謀との二つにて候。若し勢を合はせて戰はば、六十餘州の兵を集めて武藏・相模の兩國に對すとも、勝つことを得難し。若し謀を以て爭はば、東夷の武力唯利を摧き堅を破る内を出でず。これ、欺くに易くして、恐るゝに足らざる所なり。合戰の勢にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未だ生きてありと聞し召され候はば、聖運遂に開かるべしと思し召され候へ」と、賴しげに申して、正成は河内に歸りにけり。（太平記）

阿部野　今の大阪市住吉區の内

霜月　正平二年（一三〇七）十一月

この時楠木正行は山名時氏を攻めてこれを打破つた

細川顯氏も續いて敗走した

渡邊の橋　今の大阪市の天滿橋と天神橋との間にあつたといふ

四條縄手　大阪府北河内郡甲可村四條驛

最後の參内

阿部野の合戰は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を煖め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞はりて、馬に乘る者には馬を牽き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

兩度の合戰
河内國（大阪府）
摂田林の戰と攝津國（同上）阿部野の戰
將軍
足利尊氏
左兵衛督
足利直義
淀
京都府久世郡淀町
八幡
京都府綴喜郡八幡町
共に淀川の左岸にある
正時
吉野朝の忠臣
正行の弟
贈正四位
四條中納言隆資
藤原隆貫の子
後從一位大納言に累進した
正平七年（一三五二）
男山の戰に討死した
贈左大臣

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に犯し奪はれ、遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

正行小楠敵兵を數條ふ

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆

湊川
今は神戸市の内
討死
延元元年（一九三六）
五月十七日

資を以て申しけるは、「父正成麁弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで河内へ歸し、『死殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕ること候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡く

主上
後村上天皇

し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參內仕つて候」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢を盡くして向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずることは、勇士の心とする所なれば、今度の合戰命を下すべきに非ずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし」と仰せ出されければ、正行頭を地に着け、とかくの勅答に及ばず、只これを最後の參內なりと思ひ定めて退出す。

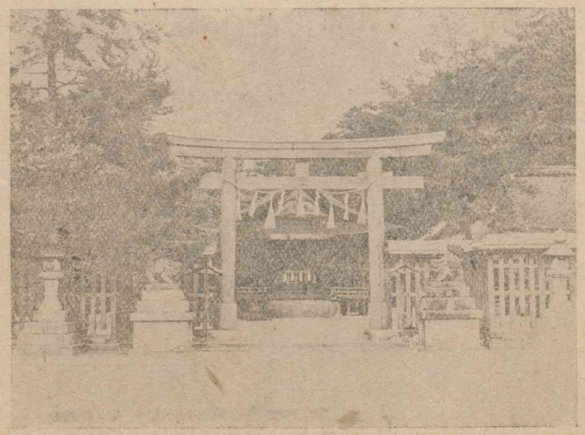
勅答
正しくは奉答とあるべき處

和田新發意
名は賢秀
楠木氏の族人
吉野朝の忠臣
贈從四位

新兵衛
和田正朝
賢秀の弟
楠木氏の族人
吉野朝の忠臣
贈從四位

如意輪堂
吉野山中藏王堂東北にある佛寺
本尊は如意輪觀世音菩薩

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書きつられて、その奥に



四條畷神社

歸らじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞ留むると、一首の歌を書留め、遂修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切つて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

三浦梅園
名は晉
儒者
豐後國（大分縣）杵築の人
寛政九年（一七九七）卒
年六十七
贈從四位

司馬溫公
名は光
支那宋朝の名臣・儒者

一八　誠　　三浦梅園

一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはんは愚なり。增さずといふは妄なり。水を加ふることは我にして、增すと增さざるとは我にあらず。強ひてその辨を求めずして可なり。我にあるところの誠を盡くす、これ君子の道なり。

誠とはうそを言はざることとのみ心得たらんは愚なることなり。ある人司馬溫公に、誠に入る道を問ひければ、妄語せざるより入るとぞ。なるほど妄に語らず、うそを言はぬより誠の道には入るなれども、うそを言はぬを誠とはいふべからず。僞を言はぬに對する信は小さし、僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にもかゝらぬ樣なれども、內に一つの誠といふものあつて、奪ふべからず、隱すべからず、味ますべからず、覆ふべからず、その時到るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、子を結ぶ。その子を水に腐らし、火に燒きて芽を出さずといふは、その子の咎ならんや。これによりて子を實といふ。實は即ち誠なり。誠ならざるものの有りて、腐れたるものは生ぜず、痛みたるは苗瘁く。人の誠も

三浦梅園

なほかくの如し。

昔衛の靈公といひし君、夜夫人南子と共に坐しけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、公門の下にして聲なく、門を過ぎて又鳴りけり。靈公「誰なるべきか」と南子に問ひければ、「こは蘧伯玉なるべし。禮に『公門に下り、路馬に式す。』といふことあり。『忠臣と孝子とは昭々の爲に節を信べず、冥々の爲に行を墮さず。』といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり、夜なればとて禮を廢てじ」といひけり。靈公人を遣はして見しめけるに、果して伯玉にてありけり。人知るまじとて欺くは妄なり。四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、吾知る。いかでかおほひ隱すべき。たとへば一升の米、日々に二三十粒を取らんとも置かんとも、知れざるべし。然れども久しく置くときは增し、取るときは減る。

靈公　支那春秋時代の衛の君

蘧伯玉　衛の賢者　名は瑗　衛公に仕へた

公門に下り　士大夫、公門ニ下リ、路馬ニ式ス。（禮記、曲禮）

忠臣と孝子とは　忠臣ト孝子トハ、昭々ノ爲ニ節ヲ信ベズ、冥冥ノ爲ニ行ヲ墮サズ。（列女傳）

四知　天知ル、地知ル、我知ル、子知ル。（後漢の楊震の語）

草木も然り。朝見し色も暮に見し色も、昨日見しも今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふもの少しの間斷なき故に、いつ太るともなけれども次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには仲びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、美しく照ればこそ、人至りたる時も香きよく色麗しけれ。人の至るを待ちて香を放ち色を出さんとせば、筈にあふことあるべからず。常々心にかけて帚灑したらん座席と、俄に蜘蛛のい取り柱ふきたらんとはいかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み僞にかざらんは誠の俄掃除なるべし。「其の肺肝を見るが如し」とて、人欺くべからず、我が心を欺くなり。

いつはりと人に言ひてはやみなまし心の問はばいかゞ答へ

其の肺肝を人ノ己ヲ視ル、其ノ肺肝ヲ見ルガ如ク然リ。（大學）

僞と　なき名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はばいかゞ答へむ（後撰集）

畠山重忠
源頼朝の臣
鎌倉幕府創業の元勳
元久三年（一八六六）卒
年四十二

鎌倉殿
源頼朝

芥川龍之介
文學者
東京生
昭和二年歿
年三十六

馬琴
瀧澤氏
名は解
江戸時代の小說家
嘉永三年（一八五〇）卒
年八十二
贈從四位

む。

この歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を顧みて、いかに今の如く誠ならざることをばせしぞ、言ひしぞ、人をば欺くになどて自らの心を自ら欺けると咎めたらんには、自ら恥づかしくなり、獨り居ても額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、「僞なき旨を起請を以て申し上ぐべし」とありければ、「我一生僞を言ひしことなし。僞なしと申し上ぐれば、この事に限りて起請をば書くまじ」とて、終に書かざりしこそ勝れていみじく聞えはべれ。（梅園叢書）

一八　戲作三昧

芥川龍之介

「これは初から書直すより外はない」。

弓張月
椿說弓張月
源爲朝を主人公とした小說

南柯夢
三七全傳南柯夢
傳奇小說

八犬傳
南總里見八犬傳
里見義實の遺臣八人を主人公とした小說
前後二十八年を費して完成した

端溪
支那廣東省にある硯石の名產地

蹲螭の文鎭
うづくまれるみづちの形をつまみにつけた文鎭

硯屏
文房具の一
硯の先に立てる屏風形のもの

馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書きつゝある。

机の上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌まはしい不安を禁ずることが出來ない。

「自分はさつきまで本朝に比倫を絕した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に自惚の一つだつたかも知れない」。

遼東の豕
遼東ニ豕有リ、子ヲ生ム。白頭ナリ。異トシテ之ヲ獻ゼントシ、行キテ河東ニ至ル。群豕皆白キヲ見、慙ヲ懷キテ還ル。（漢書、朱浮傳）

かういふ不安は彼の上に何よりも堪へがたい落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が、自分も結局彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「さとり」と「あきらめ」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戰ひ續けた。若しこの時、彼の後の襖がけたゝましく開けはなされなかつたら、さうして「お祖父樣、只今」といふ聲と共に柔かい小

さな手が彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖を開げるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父樣、只今」

「おゝ、よく早く歸つて來たな」

この語と共に、「八犬傳」の著者の皺だらけな顏には別人のやうな悅が輝いた。

瀧澤馬琴
歌川國貞畫

茶の間の方では甲高い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折か

ら悴の宗伯も歸り合はせたのらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣に曝された頰が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね」。

栗梅の小さな紋附を着た太郎は突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのをこらへようとする努力とで、ゐくぼが何度も消えたり出來たりする。――それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日」。

「うん、よく毎日」。

「御勉强なさい」。

馬琴はとう〳〵噴きだした。が、笑の中ですぐ又語をつなぎながら、

「それから」。

「それから――えゝと――癇癪を起しちやいけませんつて」。

「おや〳〵、それきりかい」。

「まだあるの」。

「どんなことが」。

「えゝと――お祖父樣はね。今にもつとえらくなりますからね」。

「えらくなりますから」。

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて」。

「辛抱してゐるよ」。

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと〳〵よく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は惡戯さうに、ちよいと彼の顏を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

淺草の觀音
東京市淺草區淺草公園にある金龍山淺草寺の本尊

「うん。」

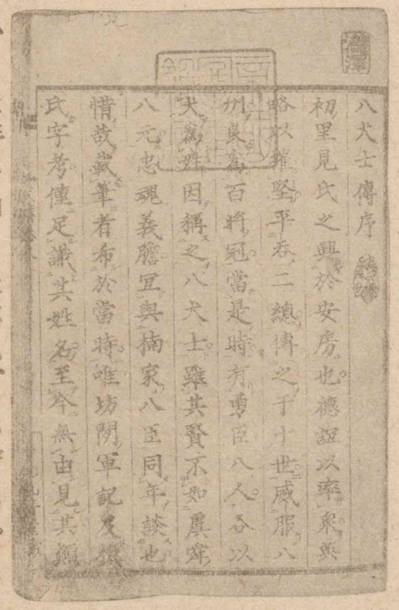
「淺草の觀音樣がさういつたの。」

かういふとともに、この子供は家内中に聞えさうな聲で、うれしさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。

さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのはこの時である。

擇版
八犬士傳序
初メ里見氏ノ安房ニ興ルヤ、德望以テ衆ヲ率ヒ、英略以テ堅ヲ摧ク。二總ヲ平呑シテ之ヲ十世傳ヘ、八州ヲ威服シテ與ク百將ノ冠ダリ。是ノ時ニ當リテ、勇士八人有リ。各〻犬ヲ以テ姓ト爲ス。因ツテ之ヲ八犬士ト稱ス。其ノ賢虞舜ノ八元ニ如カズト雖モ、忠魂義膽宜シク補家ノ八臣ト平ヲ同ジクシテ談ズベシ。惜シイ哉筆ニ載スル者當時ニ希シ。唯坊間ノ軍記及ビ槇氏ガ宇考、僅カニ其ノ姓名ヲ識ルニ足ル。今ニ至リテ其ノ顚末ヲ見ルニ由無シ。



南總里見八犬傳
瀧澤馬琴手譯
本譯

彼の唇には幸福の微笑が浮んだ。それと共に彼の目にはいつか涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、この孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「觀音樣がさういつたのか。『勉强しろ、癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。』」

六十何歲かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は、家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆が進むに從つて、その光のやうなものは、次第に大きさを增して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ。……

「あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうして、それが刻々に力を加

へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には、何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼には、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を辷りはじめる。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて來る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつゞけろ。今已が書いてゐることは、今でなければ書けないかも知れないぞ。」

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。却つて目まぐるしい飛躍のなかに、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて來る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦である、或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう、どうして戯作者の嚴かな魂が理會されよう。こゝにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑛石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。……

その間も、茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には、庇弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめるのに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ」。

やがてお百は、針へ髪の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので夢中になつていらつしやるのでせう」。

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困り者だよ。ろくなお金にもならないのにさ」。

お百はかう言つて、悴と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。お路も默つて針を運び續けた。蟋蟀はこゝでも、

禍福は糾ふ纆
鵩ト福ト、何ソ糾纆ニ異ナラン。（鵩賦）

人間萬事
人間萬事塞翁ノ馬。推枕軒中雨ヲ聽キテ眠ル。（元の僧照晦機）

福の倚る所
鵩ハ福ノ倚ル所、福ハ鵩ノ伏ス所、孰レカ其ノ極ヲ知ラン。（老子）

犬塚信乃
名は戌孥
八犬士の一孥の字の玉をもつてゐた

古河
茨城縣猿島郡古河町
古河公方足利成氏のゐた處

村雨
信乃の父犬塚番作が成氏の兄春王から預つた名刀
信乃の知らぬ間に惡漢にすりかへられた

書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。（現代小說全集）

二〇　芳流閣

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ纆の如し」。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、はた禍の伏す所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし憾をこゝに釋く由もなく、事急にして、意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、あまたの圍を切開きて芳流閣の屋の

犬飼見八
八犬士の一信の字の玉をもつてゐた

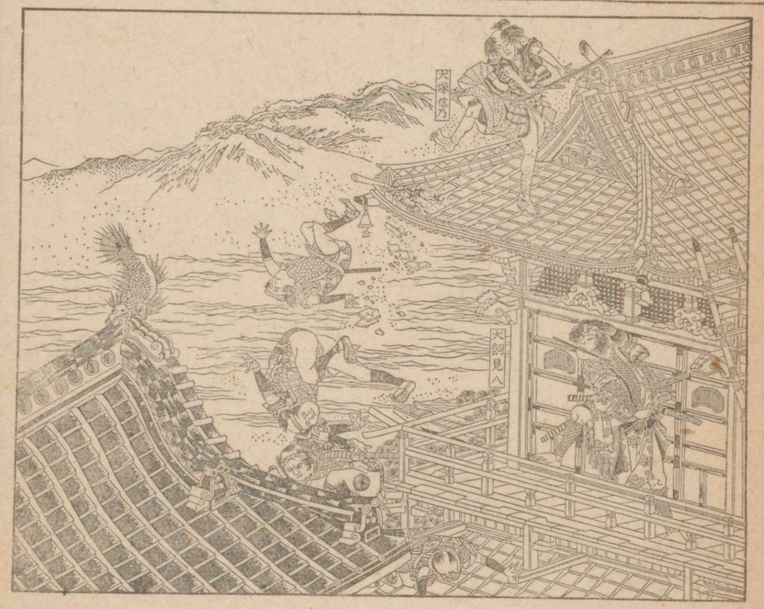
上に攀登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛ましし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして月來獄舍に繫がれし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。犬塚信乃を搦めよとて、懸に擇み出されつ、他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波に似て、下には大河滔滔たる、こゝ生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟

鶴
こふのとり
おほとり
丹頂の鶴に似てゐる

成氏朝臣
古河公方足利成氏
横堀史在村
成氏の老臣
墨氏
墨翟
周代の人
宋に仕へた
魯般
公輸般
周代の人
楚に仕へた

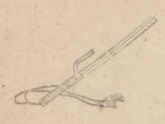
楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと鼈の樹傳ふ如くさら〳〵と登りはてたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なる鸞の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。又只閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外のかたは、綿連として杳かなる河水めぐりて砌を漫せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど羅に入りぬ、獸なら



芳流閣の上の奮闘
南総里見八犬傳

ねど狩場に在り。三寸息絶ゆれば事みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時、信乃思ふやう、「初層。二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斬りおとしつる後は、絶えて近づく者もなきに、今唯一人登り來ぬるは、よに覺ある力士ならん。



十手

膳臣巴提便
欽明天皇の七年百濟に使したとき虎穴に入つて虎を刺殺した

富田三郎
和田義盛の士源實朝の面前で長さ三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折つた

しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。さもあらばあれ一個の敵なり、引組んで刺違へ、死するに難きことやはある。よき敵ごさんなれ、目にもの見せん」と血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方桿に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍固より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役儀に擇み出されしかひもなし。搦め取るとも擊たるとも、勝負を一時に決せんものを」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御諚ざふ」と呼びかけて、持つたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桿の左の方より進み登りて組まんとすれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に擊つをはつしと受留めて、拂へば透かさず打込む刀尖をさゝ

へて流す一上一下、辷る甍を踏みとめて、しきりに進む捕手の祕術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるもなく、またゝきもせず氣を籠めて、見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音・かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟にして死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀

の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて礑と打つ、十手を丁と受けとむる信乃が刀は、鍔際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむずと組むを、そがまゝ左手に引着けてかたみに利腕しかと取り、捩ぢたふさんとえいごゑあはせて揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏辷らして、河邊の方へころ〳〵と身をまろばしし覆車の米苞坂より落すに異ならず。匂配嶮しき棧閣に削りなしたる甍の勢、とゞまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より未遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へうちかさなりつゝどうと落つれば、傾く舷

と立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきつて、射る矢の如き早川の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

二　弟を戒む

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎
評論家
哲學者
文學博士
山形縣鶴岡の人
明治三十五年（一九〇二）歿
年三十二

歳も暮になりて、寂寞の夜半に物思ふべき時とはなりぬ。先頃の御書、修學讀書に關するくさ〴〵の御尋は眞に學徒肝腎の用意、及ばずながら愚見左に申述ぶべく候。

今の教育はやゝもすれば器を作りて人を作らず、人に使はるべき小才を作りて人を作るべき大器量を作らず。これはたよく〳〵思案あるべく候。近くは世上幾千幾萬の人の頭となりて大事業に當れる人々を御覽あるべし。才學

人に優れたる例としては甚だ少く候ぞ。所詮はその人物の宏量有德なるに歸すべく候。今の教育に人となりて、中學より進みて高等學校、大學を卒業し、その學秀でて、外國にまで留學せる學者先生たちはその數少からざれども、多くはたゞ〳〵學者なり、技術家なり。乞食も一朝金を拾へば富者となり得ると一般、要は學術を拾ひ得たる人と言ふまでにて候。京童が活字引、活書籍などと申すはこれなり。たまたま學を修め術を覺え得たる者のかくて果てんは、人として口惜しからずや。古來大人物と稱せらるゝ人のためしにも考へて、よく〳〵勘考あるべく候。

筆蹟
是人に於て始めて崇拜的英雄に遭遇せしの感あり興會不レ淺感謝の念日々深く相成申候小生は來

高山樗牛筆

されば立身の第一義は人物修養の一事に歸着すべきか。この大歸着の標點あり、この大安立の地盤ありてこそその學術事業も眞生命眞活動を得たりと申すべけれ。この本末を顚倒して、たゞ〳〵才學技巧の巷に走らんは、若き時は知らず、年老い心靜まりての後悔及ぶまじく候。

人物の鍛錬は行住坐臥、一念時も忘ずることあるべからず候へども、分けて古人の傳記など味讀熟量せんこと最も肝腎と存じ候。吾等の生息する今日はこれを過去無量劫に比すれば泡沫夢幻の短日月なり。この短日月に於て吾等の接觸し交通し得る人とてはその數限りあることなり。この短日月の限りある人の中には幾何の英雄豪傑あるか知らざれども、これを過去萬邦の數千年の歷史に現れたる偉人大人物に較ぶれば、げに九牛の一毛とや言はん。故に活ける人の中にて師とすべきあらば固より仰いで師とすべし。されど吾等の龜鑑と崇め、理想と尊ぶ人は過去にあることと覺悟あるべく候。過去の人は言はず語らず、寂寞として古蹟の中に永眠せりと雖も、その遺蹟は日月の如く明らかに、今も昔の如く世界の上に照臨せり。仰いで師とすべく、撈りて友とすべし。彼もの言はざれども、その不言の教こそは一切聲聞のそれよりも貴く、かれ手を握らざれども、その默契會通の三昧こそは、まさしく異身同體の親しみありと謂ふべけれ。書を讀み道を求めんもの、這個の三昧に入らずば、これ寶の山に入りて手を空しくして歸らんにも似たるべく候。

更にこの義を強く申すべし、日月天に懸らずば人は行くべき道も分らず、暗中に迷ふべし。若し吾等の心にその理想と尊び、光明と仰ぎ、人物修養の大眼目と信奉すべき大人物なくば、これ天に日月無きと等しく、吾等の心、暗黑中に迷はざるもの幾人ありや。或は利に餓ゑ、或は智に渴き、營々として世を夢の如くに暮す人も、若し中宵心を沈めて、我の事業に何の理想あるか、我の未來に何の光明あるか、我の人物に何の標的あるか、我に面して笑ふもの幾百千人ありとも、眞に我が心と會通融和せる心は世に果してこれありやと自ら問はば如何。誰かその身のさながら暗中廣野に彷徨せる天涯萬里の孤客にも等しきことを感ぜざるべき。あはれ心細きは決して人の上には候まじ。われ人亦心を鎭

めてよく〳〵思案すべきにて候。人生一期の大事、これに過ぎざるべく候。

とかくは言抽象に馳せ、會得の程も如何と存じ候へども、思ふこと憚りなく申し陳じ候。今の世に學者・名士と謂はるる者は必ずしもその實御身等の眼に或は映ぜん程のえらき人々にはこれ無かるべく候。その博く物識れる點をこそ我が師とも賴み申すべけれ、人物修養の一大事に臨みては觀心自得の工夫の最も肝要なることを先づは心得らるべく候。世に知識と申すものは無量無邊、幾百代の生を累ね、幾千劫の世を數ふとも盡くし得らるまじく候。生れつきての好みならば是非もなく候へども、益もなき事を究め盡くさんとて再び受けがたき人身を消耗し去らんは、いよ

いよ心なき業なるべし。所詮は吾が安心を堅め、吾が人物を磨き、當來二世を通じて如說修行の人たらんの大願に資するにあらざるよりは、一切の道敎學智すべて無用と觀ぜらるべく候。學問の眞工夫、この外に出でざるべしと相信じ申候。委細の旨は重ねて申すべし。あなかしこ、この書輕々しく御覽あるまじく候　（人生讀本）

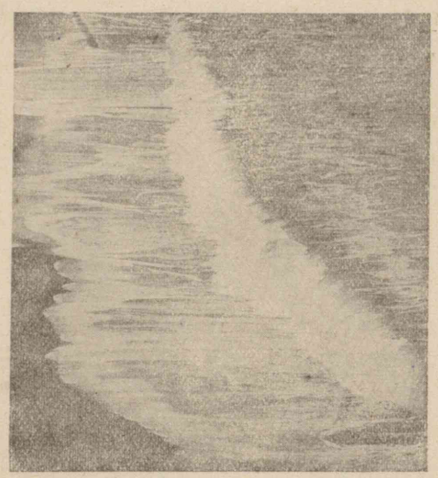
三　物の初

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
帝國藝術院會員
文化勳章第一回の拜受者
慶應三年（一八六七）江戸生

よろづのもの、初こそは美はしくおもしろけれ。混沌わづかに剖けて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう心よかりけん、それは見ねば知らず。

先づ年の首の朝ぼらけ、大路に箒目の浪清くして、千門に旗の日の紅ひるがへる清々しさ、行交ふ人々の面の色も若々しう、悔恨を昨夜の闘の彼方に捨てて、希望をこの曉の風の息吹に蘇らせ、今歲はと勇める眼の中の威勢も好もしや。



潮の　はじめ

雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焰旋りて瑪瑙たぐるゝ太陽のさし昇りたる、日の出づる初の景色は、春といはず、冬といはず爽かなり。

樹影沈んで夕の水ひろく、暮靄地に這ひて人の語靜まる時、白玉澗を含んで大いなること車輪の如き月の薄縹の天にそつと出でたる、その初の涼しき心地はこれを何にか比べん。

潮のはじめも亦おもしろし。濱の沙固うして、小礫やゝ乾き、汐木小白みて寄藻香を放つ干汐の極みに、沖の方やゝ膨れて、さし潮の風に乘り來り、一分々々に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻・汐木のぬれ〳〵て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殼も艶やかに、磯石未だもの言はず、濤なほ怒らねど、やがては澎湃轟籍の響、震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を卷いて又延べて、千古萬古人間にその讀まんことを逼る日々の凄じき業を繰返さんとする意を示せる、何ともいへず壯なる狀、含まる。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹のその初、杉も檜もひよろ〳〵として、松も欅もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡びの目を張りて笑み、風の答には悲しみの

孔　孔丘　支那周代の聖人　儒教の祖

孟　孟軻　支那周代の賢人

聲をうるませてをのゝけど、その中に不屈の意氣を保ちて、雪虐ぐれども偃して復起き、霜はづかしむれども萎けてまた振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思やさしく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして、終にその生を遂げんとするの勢ある、孔孟出でざるも道こゝに開かれたりといふべし。

蔡の初、菘の初、かはゆき甲柝の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ伸びんとして屯まり、身を屈めてひと力入れ、根入やうやく足りて辛うじて世に出でたる、嫩青微綠やはらかにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初の卵殼の中にありてひゝと鳴きたる、啐啄事了りて綿毛

に風の當りたる、皆あはれに勇まし。かの聲には鰐竹裂けんとし石破れんとするの韻を藏し、この姿には鐵翮颯を截りて崑崙を凌ぐの威を具ふ。

魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色さへ定かならぬに、四蹄はやくも輕く草の煙を蹴て、母馬に追ひつくやがてに、その乳を立飲したる、あとなくして、しかも至健の德をあらはす。

獅子の兒の怒毛も未だ硬からぬに、千尺の崖より墜されて、巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、さすがに仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒ごころのやるせなき思やすらんを、獸王の血統として、女々しからぬも尊し。

よろづのものを觀るに、その初皆美はしく好し。人の子の生るるや惡相なしと聞く。物皆始あり、願ふところはその始ある所以を遂げんことなるのみ。（洗心錄）

育兒古觀
竹内栖鳳畫

浮島が原
靜岡縣愛鷹山の南麓なる浮島沼附近の原
沼津市の西の原驛附近
九郎御曹司
源九郎義經
兵衞佐殿
前右兵衞權佐源頼朝
木曾
木曾冠者源義仲
甲斐の殿ばら
武田信義その子信光など

二三　浮島が原

九郎御曹司浮島が原に着き給ひ、兵衞佐殿の陣の前二町ばかり引退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、こゝに白旗・白印にて淸げなる武者五六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん、覺束なし。信濃の人々は木曾に從ひて留

裾濃　鎧のをどしの色の上は白く下になるほど色を濃くぼかしたもの

五枚兜　しころの五枚になつてゐる兜

鍬形

りぬ。甲斐の殿ばらは二陣なり。いかなる人ぞ。假名・實名を尋ねて參れ」とて堀彌太郎を御使にて遣はされ、家子・郎等數多引具して參る。間を隔てて彌太郎一騎進み出で申しけるは、「こゝに白印にておはしまし候は、誰人にて渡らせ候ぞ。『假名・實名を慥に承り候へ。』と鎌倉殿の仰にて候」と申しければ、その中に二十四五ばかりなる男の色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の、裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に鍬形うちて、猪頸に着、大中黒の矢負ひ、滋籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乘りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿もしろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛のよし承り、夜を日に繼ぎて馳參じて候。見參に入れてたび候へ」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟

佐藤三郎　名は繼信

同四郎　佐藤四郎忠信　三郎繼信の弟

伊勢三郎　名は義盛

にてまし〳〵けりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子佐藤三郎を呼出して、色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を牽かせけり。かくて佐殿の御前に參り、この由を申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見參せん」とのたまへば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司、大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐藤三郎・同四郎・伊勢三郎これら三騎召連れて參らる。佐殿御陣と申すは、大幕百八十張ひきたりければ、その内は、八箇國の大名・小名並みゐたり、各、敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司兜を脱ぎて童に持たせ、弓取直し、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ直られける。「そ

頭の殿　左馬頭源義朝
池の尼　平忠盛の後妻　清盛の繼母
伊豆の配所　田方郡蛭が島　蛭山の近く
伊東　伊東祐親
北條　北條時政

れへそれへ」とぞ仰せらるゝ。しばらく辭退して敷皮にぞ直られける。

佐殿は御曹司をつく〴〵と御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司もそのいろは知らねども、共に涙に咽び給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿に後れ奉りて、その後、御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東・北條に守護せられ、心にまかせぬ身に

頼朝義經の對面
義經記

て候ひし程に、奥州へ御下向のよしは、かすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思し召し忘れ候はで、取敢へず御上り候こと、申し盡くし難く悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし。皆平家に相從ひたる人々なれば、頼朝が弱げをまぼりたまふらんと思へば、夜も夜もすがら平家の事のみ思ひ、又或時は、平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし、代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし、他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難く、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿よみがへられたまひたるやうにこそ思ひ候へ。我

八幡殿　八幡太郎源義家

むなうの城　未詳

栗屋川　今厨川と書く　盛岡市の西郊

刑部丞　新羅三郎源義光

魚と水との如く　孤ノ孔明有ルハ、猶魚ノ水有ルガゴトシ。（蜀志）

亡魂　父頭の殿義朝の

等が祖先八幡殿の、後三年の合戰に、むなうの城を攻められしに多勢皆滅されて無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて王城を伏拜み、『南無八幡大菩薩、御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて本意を遂げさせてたべ。』と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありけん、都におはする御弟刑部丞は内裏に候ひけるが、俄に内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られける路次にて勢打ちくはゝり、三千餘騎にて栗屋川に馳來て、八幡殿と一つになりて、つひに奥州を從へたまひける、その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたる心に、いかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休めん。』と宣ひもあへず涙を流したまひけり。御曹司は、とかくの返事なくして、袂をぞ絞られける。

山科　今の京都市東山區山科

鞍馬　京都の北方の山里

秀衡　陸奥田羽の押領使鎮守府將軍藤原秀衡

これを見て大名・小名、互の心の中推量られて、みな袖をぞ濡されける。

しばらくありて、御曹司申されけるは、『仰の如く、幼少の時御目に懸りて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へまゐり、十六まで形の如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便を作るよし承り候間、奥州に下向仕りて秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛のよし承りて取敢へず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。命をば故頭の殿にまゐらせ候。身をば君にまゐらする上は、いかゞ仰に從ひまゐらせては候べき。』と申しも敢へず、涙を流したまひけるこそあはれなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にて上せたまひけれ。（義經記）

鵯越　神戸市西北方の山徑
七日　安徳天皇の壽永三年（一八四）二月七日
鷲尾　三郎經春
一谷　神戸市の西部にある谷

二四　鵯越

同じき七日の曉、九郎義經は鷲尾を先陣として、一谷の後、鵯越へぞ向ひける。頃は二月の初なり、霞の衣たちへだて、綠を添ふる山の端に、白雲絶えく〳〵、聳えつゝ、先づ咲く花かとあやまたる。未だ歩みなれぬ山路なり、行末はそこと知らねども、征く馬の足に任せつゝ、各先にと進みけり。まだ仄暗き程なり、道には泥みけれども、矢合はせ時を定めたれば、明くるを待つに及ばずして、谷に下り峯に登り、引懸け〳〵打ちけるに、一谷の後に篠が谷といふ處に人の音しければ、押寄せて「何者ぞ」と問ふ。名乘ることはなくて散々に射ければ、「此奴ばらは平家の雜兵にこそあるらめ、一々に搦め捕つて首を斬り、軍神に祭れ」とて源氏も散々に射

劫火　佛教の語　世界の破滅する時起るといふ大火災

ければ、此處にて平家多く討たれにけり。

その後鷲尾尋承にて下り打つ程に、辰の半ばに、鵯越、一谷の上、鉢伏、磯の途といふ處に打登る。兵ども遙かにさしのぞきて谷を見れば、軍陣には楯を並べ突き、士卒は矢束をくつろげたり。前は海、後は山、波も嵐も音あはせ、左は須磨、右は明石、月の光も優ならん。追手の軍は半ばと見えたり。喚き叫ぶ聲、射違ふ鏑の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗・赤符立て並べて、春風に靡く有樣は、劫火の地を燒くらんもかくやと覺えたり。

時已によくなりたり。大手に力を合はせんとて見下せば、實に上七八段は小石交りの白砂なり。馬の足留るべき樣なし。徒歩にても馬にても落すべき處に非ず。さればとて、さてあるべきことならねば、只今まで乘りたりける大鹿毛には佐藤三郎兵

白覆輪
刀の鞘や鍔の緣を金銀などで覆ひ飾るを覆輪といふ
白覆輪は銀
黄覆輪は金

越中前司盛俊
平盛國の子
壽永三年（一八四）一谷で討死した

衛を乘せ、我が身は大夫といふ馬に乘替へて、谷へ打向け給ひ、「麁の通路は馬の馬場ぞ。各、落せ〳〵。」と勸め給ふ。兵ども我も我もと馬をば谷へ引向けて、心は先陣と逸れども、さすがいぶせき磯なれば、手綱を控へてやすらへば、馬も恐れて退きけり。互に顏と顏とを見合はせて、何處を落すべしとも見えず。

軍將宣ひけるは、「一つは馬の落樣をも見、一つは源平の占形なるべし。」とて、葦毛の馬に白覆輪、白ければ白旗に準へて源氏とし、鹿毛の馬に黄覆輪、赤ければ赤旗に準へて平氏とて追下す。各、木の間にてこれを見る。上七八段は小石交りの白砂なれば、轉ぶともなく落つるともなく下りつゝ、巖の上にぞ落着きたる。ややしばらくあつて、岩の上より轉び下り、越中前司盛俊が假屋の後に落着きて、源氏の馬は這起きつゝ、身振ひして峯の方を守り、

二聲嘶え、篠草食みて立つたり。平家の馬は身を打損じ、臥して再び起きざりけり。

城中にはこれを見て、「敵の寄すればこそ鞍置馬は下るらめ。」とて騷ぎ迷ひける處に、御曹司は、「源氏の占形こそめでたけれ、平家の軍、左樣あるべし。人だに心得て落すならば、過ち更にあるまじ、落せ、落せ。」と宣へども、我だに恐れて落さねば、人も恐れてえ落さず。白旗五十旒許梢に打立てて宣ひけるは、「守つて時を移すべきに非ず。磯を落すには手綱數多あり。馬に乘るには、一に心、二に手綱、三に鞭、四に鐙とて四つの義あれども、所詮心をもちて乘るものぞ。若き殿ばらは見も習へ、乘りも習へ、義經が馬の立て樣を本にせよ。」とて眞逆樣に引向け、「續け〳〵。」と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて、流れ落しに下したり。三千餘騎の兵ども、大

將軍に續け」とて、白旗三十旒城の内へ指覆ひ、轡並べて手綱搔繰り、同じ様に尻足敷かせて、さと落して、壇の上にぞ落留る。それより底をさしのぞいて見れば、巖石峙つて苔むせり。刀の刃に草覆へる様なれば、いといぶせき上、十・二十丈もやあるらんと見え渡る。下へ落すべき様もなし、上へ上るべき便もなし。互に堅唾を呑みて思ひ煩へる所に、三浦黨に佐原十郎義連進み出でて、「我等甲斐・信濃へ越えて狩し、鷹使ふ時は、兎一つ起いても、鳥一つ立てても、傍輩に見落されじと思ふには、これ

三浦黨
相模國（神奈川縣）三浦郡地方にゐた武士の一團

佐原義連鵯越を下る
齋藤弓枝筆

畠山
莊司重忠

護田鳥尾
鷲の羽に薄黑い文があつてうすべう（おすめどり）の羽に似てゐるもの

鞭打
馬の横腹の鞭の當る部分

七寸
馬の丈四尺七寸

に劣る處やある。義連仕らん」とて、手綱搔繰り、鐙踏張り、只一騎眞先かけて落す。御曹司これを見給ひて、「義連討たすな。續け、者ども、續け、者ども」と下知して、我が身も續きて落されけり。畠山は赤絨の鎧に護田鳥尾の矢負ひ、三日月といふ栗毛馬の太く逞しきに乘つたりけり。この馬鞭打に三日の月程なる月影のありければ、名を得たり。壇の上にて馬より下り、さしのぞいて申しけるは、「こゝは大事の惡處、馬轉ばしては惡しかるべし。『親にかゝる時、子にかゝる折』といふことあり、今日は馬を勞らん」とて、手綱・腹帶より合はせて、七寸に餘りて大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負うて、椎の木のすだち一本捩切り杖につき、岩の迫をしづ〳〵とこそ下りけれ。東八箇國に大力とはいひけれども、只今かゝる振舞人倫にはあらず、まことに

小具足
小手・脚帶・脇楯だけ着けること

鬼神の所爲とぞ、上下舌を振ひける。畠山は「この巖石に馬損じては不便なり。日頃は汝にかゝりき、今日は汝を孚まん」といひける、情深しと覺えたり。その後三千餘騎、手綱搖繰り、鐙踏張り、手を握り、目を塞ぎ、馬に任せ、人に隨つて、劣らじ〳〵とおとしけるに、然るべき八幡大菩薩の御計らひにやと申しながら、馬も人も損ぜざりけるこそ不思議なれ。

落しもはてず、白旗三十旒さと捧げ、三千餘騎同時に鬨を作る。山彦答へて夥し。平家の城郭に亂れ入りて、縱ざま横ざま、蜘蛛手十文字に馳廻り、喚き叫んで戰ひければ、城中には、東西の城戸口ばかりこそ防ぎけれ、さしも恐しき巖石より敵寄すべしとも思はざりければ、打延べて「左右の城戸口の弱からん時軍せん」とて、鎧・物具脫置きて、小具足ばかりにてゐたる處へ、はと寄せ、どつ

樂慶
初名鬼若丸
熊野別當湛增の子
源義經の臣

と鬨を作りたれば、弓矢を取り馬に乘る隙を失ひ、あわて迷ひ、味方の兵も皆敵に見えければ、適〻馬に乘り弓矢を番ひける者も味方討に討殺され斬殺されて、上になり下になつて、肝も心も身にそはず、度を失ひ騷ぎふためきける有樣は、少魚のたまり水に集り、宿鳥の枝を爭ふに異ならず。

御曹司下知し給ひけるは、「城郭廣博なり、敵その數を知らず、多く我が軍を滅さんこと、最も不便なり。火を放て」と宣へば、武藏坊辨慶、屋形に打入り、假屋に火をさす。折節西の風烈しくして、猛火城の上へ吹覆ふ。平家の軍兵、煙に咽び火に責められて、今は敵を防ぐに及ばず、取るものも取敢へず濱の汀に逃出でつゝ、海の藻鹽に馳入つて、船に乘らんとぞ迷ひける。助船も多くありけれども、そも然るべき人々をこそ乘せけれ、次々の者どもをば

乘せざりければ、乘らん、乘せじとする程に、多く海にぞ沈みける。猛火の煙、蹴立の灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵にぞ討たれける。されば助るは希に、亡ぶるは多し。無慚といふもおろかなり。（源平盛衰記）

二五　富士の靈

野口米次郎

野口米次郎
詩人・英詩人
慶應大學教授
歐米に在ること多年ヨネ、ノグチとして知られてゐる
明治八年（一八七五）愛知縣津島町生
四日市
三重縣四日市市津島町から南へ二十八粁

私は見すぼらしい田舍の一少年として、はじめて船で四日市から東上する朝の海上に富士山を眺めた。あゝ、その時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讚の幕は切つて落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且畏れ且敬つた。私が若しこの時、富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人としての私の人生は開かれて居らなかつたかも

四年前
大正九年
觀音崎
横須賀市の東に突き出てゐる岬三浦半島の東端で上總の富津洲と共に東京灣の咽喉を扼してゐる

知れない。私の自然禮讚は富士山で始り、富士山で終つてゐる。實際、詩人の一生は、自然禮讚の四文字に盡きてゐる。

詩人として、私はいつも第一印象に支配される。自然の現象が、それ〴〵特殊の姿を見せるのは、始めて接する刹那に於てだ。私は十六歳の時始めて富士山を見てから今日に至るまで、富士山の姿を近くから、又遠くから幾度眺めたか知れない。四年前の渡米の際の事だが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、淡い灰色の暮色が段々と濃くなつて行つた。甲板に立つて別れ難い日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つて居るものがある……何物か。これこそ、紫色に空をくつきり染拔いた富士山の圓錐體だ。時も時であるが、私はこの時位、遣るせない、物寂しい、孤獨の感に打たれたことは無かつた。私は聲こそ

出さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。この時の富士山位、美の極致を暗示する、世にも尊い姿はなかつた。しかし私が目をつぶつて、心の中に富士山を描く時あらはれて來る姿は、私が十六歳の時に始めて接した富士山である。私は長い年月を外國で費したものだが、私の勇氣が急に挫けた時、「われはお前を守護してゐる、恐れずに起てよ、起つて大空高く上らねばならぬ。」と私に勢を附けてくれたものは、その富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて自分の進むべき道を知らなかつた時、「われはお前を導いてやる、道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く、そこには神聖な空氣が滿ちてゐる、お前は復活せねばならぬ。」と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。「われは階段となつてお前を天に上らせよう。」「われはお前に教へて神祕の門戸をあけさせよう。」「われはお前を導いて祈禱の殿堂にはいらせよう。」と語つて、私の守護神となつたのは、私が始めて眺めた富士山であつた。私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少くとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理會して、詩歌の道を歩むことが出來た。私はそれを喜び、それに依つて生きて來てゐる。

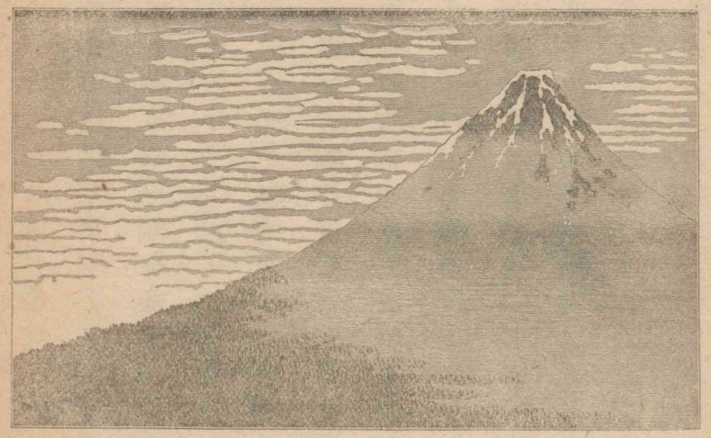
ビニヨン　英國の詩人・美術批評家　特に日本浮世繪に關る重要な著述がある　（西暦一八九―　）

ムーア　英國の詩人・批評家・圖案畫家　（西暦一八九―　）

私はこゝで私の忘れることが出來ない一挿話を語りたい。時は二十一二年前の冬で、場所は驚くべき霧が、鯱か鮫のやうに跳廻るといふ倫敦だ。私はこの薄氣味惡い、地獄の幾町目かとも思はれる倫敦の市中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながらうろつき廻つた。或一夜、詩人ビニヨンに伴なはれて、詩人でもあり又美術家でもあるムーアの招待會へ出

かけた。その晩も私の心は暗かつた、冷たかつた。ビニヨンの言葉で出かけるには出かけたが、私は談話する勇氣さへ無かつた。私は私の詩を認めてくれない英國に對して激烈な反感を持つて居つたのである。ムーアの宅へ着くと、部屋には既に澤山のお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中は倫敦の夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。無名の私は恰も鮑か諸子のやうに客と客との間を寂しく獨りで泳ぎつゝ、我ながら勇氣が無く、日東男子の沽券に關ると思つたとき、私はふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士を見た、……「凱風快晴」の圖だ。代赭色の圓錐形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。私は富士山が語るやうに感じた。「我を見て起て、西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せよ。恐れてはな

北齋
葛飾北齋
德川末期の浮世畫師
嘉永二年（一八四九）
歿
年九十



凱風快晴
葛飾北齋筆

らぬ、慄へてはならぬ。我はお前に命令する。勇氣を出せ」。私は直に生氣が五體を震動させるやうに感じた、私は直に多辯になつた、私は直に快活になつた。その時から倫敦の澁面は笑ひ始めた、……私の詩集も世に出ることになつた。私は英國文壇に打勝つた。私はどのくらゐ富士山に負ふところがあるか知れぬ。實際、私は富士山の守護で、少くとも詩人と

しての人生を開拓して來たといつても過言でない。私が英國での第一詩集「東海より」を富士の靈に捧げたのも、當然私が拂ふべき敬意の一端を表示したものに外ならぬ。（ヨネノグチ代表詩）

二六　文化と健康

渡邊錠太郎
陸軍大將
陸軍教育總監
尾張國（愛知縣）生
昭和十一年卒
年六十三

「健康な身體に健全な精神は宿る」。不撓不屈何ものをも克服しなければ已まない旺盛な鬪爭心も、義を義として正道を濶歩する中正の心も、美を解し情を知る優雅な心情も、實に健康な身體からのみ生れ出る。

身體の健康は精神の健全を招來し、精神の練達は又自ら健康を齎す。このやうにして我が大和民族は智仁勇の三德を兼備へ、遂に世界優秀の民族となつた。こんなことを思ふとき、吾々は

孝經
孔子が門人曾參のために孝道を述べた言を錄したもの

孔子
名は丘
字は仲尼
世界四聖の一
支那春秋時代の人
魯の哀公十六年（一六六）卒
年七十四

子供の病氣
孟武伯孝ヲ問フ。子曰ク、父母ハ唯其ノ疾ヲ之レ憂フ。（論語、爲政）

一個人としてではなく、國民の一員として、健康に大いなる關心を持たなければならない。各個人の健康は實に國家の盛衰に懸るのである。「元氣」で「達者」であることは單に一個人・一家族を幸福にするばかりでなく、國家の大いなる慶福である。

更に一個の人間として考ふれば、身體の健康は、人間の德行の內最も美德とする孝行を全うさせる。孝經にも、「身體髮膚これを父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始なり」とあり、孔子も亦、人の親として最も心を痛めるのは子供の病氣であるといふやうな意味のことを言つてゐる。かやうに健康は孝の最初であり、又最後である。されば、健康は人格完成の第一要諦だと斷じても敢へて過言ではない。では如何にすれば健康になれるか。

これに就いては、いづれも相當の注意を拂ひ、或は醫者に、或は健

康法に、それ〳〵信賴を寄せてその增進を圖つてゐる。併しこれらは所謂消極的の手段方法で、これだけでは決して健全な精神を宿すに足る健康體となることは出來ない。それでは如何にするか、曰く、鍛錬である。

鍛錬といふ辭は、或は現代の若い人々には少じく奇異に聞えるかも知れない。しかしながら、眞に個人の幸福と國家の隆盛とを齎す健康は、鍛錬を措いては何ものもないのである。殊に新日本の明日を背負ふ青年の身體を健全にする方法は、何よりも先づ鍛錬である。潑剌とした明朗な健康美は、いふまでもなく力を基調にした雄大さである。雄勁さの足りない美は不健康の美といはれてゐるが、鍛錬されない健康は事實あり得ない。人生の若芽時とも、いふべき青少年の頃鍛錬された人であつて

こそ、具足せる人格の士となり得るのである。私は現在にして思ふのであるが、私の今日かくあるのは、青少年時代の刻苦艱難の賜であつて、あの時代、すべての困難を耐忍び、貧しきに甘んじ、人生の目標に向つて、遲々としてではあつたが歩んだからである。その當時は、陽氣さうに綺麗な着物を着て、遊びふざけてゐた友達を見ると、時には羨ましく思ひはしたが、現在からすれば、あの時代の苦闘が私を惠んだのだと感謝してゐる。殊に現在非常に健康で、日課の一としてゐる晨朝の乘馬の度毎に、青少年の頃身を粉にして働いた思出が胸を突く。

全國の徵兵檢査の成績からしても、農村の壯丁が常に都市の壯丁に優つてゐるのは、農村の青年の日常生活が鍛錬のそれであるからである。餘りにも聞慣れた辭であるが、艱難汝を玉にす。

の眞意も亦鍛錬の讃美である。磨きに磨かれて光を增す玉、鍛へに鍛へられて鋭利を加へる刀、練りに練られて光澤を添へる絹、すべては鍛錬の結果である。難局に處して、自若として正義の大道を踏み得る者は鍛錬された人のみである。修養の人、人格の人とは、畢竟、鍛錬の人卽ち練達の人をいふのである。

それにつけて想起することは、あの歐洲大戰後、國民の生活が、全く疲弊困憊の極に達して到底復興の望みなしと思はれてゐた獨逸が、復興の第一歩を青少年の體育から踏出したことである。獨逸政府は、國力を恢復するには先づ青少年の士氣を盛ならしめねばならぬ、そのためには生活の疲弊から極度に損ぜられた青少年の健康を恢復しなければならぬと考へた。かくて、各地に體育協會が組織され、その地方の青少年の體育に當つた。それを目擊した私は、「獨逸國民は必ず復活する」と確信せざるを得なかつた。

やがて體育機關の一として、「青少年簡易宿泊所」の制度が設けられた。それは會員制度になつてゐて、その會員は獨逸國內の各所に設けられてゐる簡易宿泊所を利用することが出來る。この宿泊所はその地方の素封家の家が解放されたものか、若しくは寺院であつた。殊に興味のあることは、この宿泊所を利用するものは必ず自炊する事である。そればかりでなく、具へられた毛布その他の簡單な寢具は、必ず使用した者が整頓して、常に清潔を保つやうにする。食器その他の後始末はいふまでもない。だから、この宿泊所はいつでも氣持よく整頓されて、獨逸のすべての青少年男女のものであることがはつきりと認識され

てゐる。かくして各地から集つた青少年はその宿泊所の管理に當つてゐる人、多くは僧侶から、その地方に關する歴史的地理的の話を聞かされる。愛國心は自然と注入される。山や河や谷を跋渉して自然の偉容に接するばかりでなく、その自然を潤色するともいふべき歴史を知ることほど、國土を愛する精神を培ふものはない。殊に獨逸のやうに聯邦から成る國では、異なつた地方の風俗、傳統、人情を國民相互が知ることは國家統制上不可缺のことである。こんなにして新興獨逸の青少年男女は、リュックサックを擔いで宿泊所から宿泊所へ足を運ぶ。肉體的に精神的に鍛錬されるのは必定である。今日歐洲のみではなく世界各國の視聽を敬てるに至つた獨逸の目ざましい躍進の礎石はかくして置かれたのである。私は嘗て宿泊所の名簿

リュックサック　登山などの必要品を入れて背負ふ嚢

を繰つてみたが、そこには單に地方の青年男女ばかりでなく、有名な學者、さては貴族の名前さへも見えた。獨逸の復興はかくして青年男女の鍛錬から始められた。ベルサイユ條約の破棄は彼等が山河跋渉の間に自ら意圖されたのであらう。

ベルサイユ條約　紀元二千五百七十九年六月二十八日世界大戰の結果フランスのベルサイユで調印された獨逸の屈辱的媾和條約

私は常に全國壯丁檢査の成績に注意してゐるが、最近の傾向は、優良であるべき筈の農村の壯丁の體格さへも退歩するのではないかと憂慮される。これは國家のゆゝしき大事で、爲政の局に當る者は勿論、國民一般大いに心しなければならないことである。しかも一方、運動競技は年一年と盛になり、所謂「記錄」はめざましく向上躍進しつゝある。是等を想ひ較べるとき三省する所がなければならない。

最近所謂文化生活なるものが提唱されて、勞せずして樂な安易

な生活が國民一般を魅了してゐるやうである。しかし眞の文化生活は決して勞せずして安易逸樂の生活を求むべきものではない。若しさうであるならば、所謂文化生活は懶惰な放縱な人間をしか作らない。それでは人間としての眞の使命を果すことは出來ない。或時は不眠不休、暑さに耐へ、寒さを忍ぶあの軍隊教育の身體と精神との鍛錬こそは、全き人の和と、その分を嚴守する確乎たる規範とに生活の根據を置くのである。それでこそ如何なる難局に直面しても、從容としてこれを突破し、大義名分に生きる眞の人間が養成されるのである。

畏くも明治十五年軍人に賜はつた勅諭の中には、「質素を旨とす」。とのたまはせられた。この質素な生活からこそ、鍛錬主義の第一歩は踏出されるのである。一物も無い缺乏の生活は質素な

天の時
天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ、地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ。（孟子、公孫丑下）

生活ではなくて、貧困の生活である。貧困の生活を脱して質素な生活に入り、眞の健康が如何なる家をも占めるとき、融和と協力との微笑が社會の各部門に充滿する。古來の用兵家が戰勝の要素として說いた天の時、地の利、人の和、とりわけ人の和こそは、常に健康なる國民の間にのみ望み得られることを、私は戰史の研究の中にいつも看取した。それと同樣に、國民が擧つて健康を得られる社會生活、この生活こそは、政治の運用に於て、天の時、地の利を善用し且活用して始めて完うし得られるものであることを看過してはならない。

中學國文教科書　卷六　終

昭和十二年八月二十七日　初版印刷
昭和十二年八月二十八日　初版發行
昭和十三年二月二十日　訂正再版印刷
昭和十三年二月二十五日　訂正再版發行
昭和十六年十一月十四日　訂正三版印刷
昭和十六年十一月十七日　訂正三版發行

中學國文教科書　全十冊
定價各金六拾錢

著作者　吉田彌平
補訂者　石井庄司
發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　石村勳
發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）吉田國語

日本出版配給株式會社　元給配
東京市神田區淡路町二ノ九

広島大学図書
2000066277